

# バンドリ短編集

キズカナ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これはバンドリの少女たちと過ごす様々な日常のヒトコマ。

時に笑いあい、時に悲しみ、時に凶器と化す。

もしかしたらあなた好みのヒトコマに出会えるかも？

さあ、コーヒーでも飲みながら夢の一時をお過ごしください。

## 目次

モカちゃんを照れさせたい (青葉モカ)	1
世界を越えて (丸山彩)	4
貴方の笑顔の為に (弦巻こころ)	12
君と見る星空 (氷川日菜)	21
チョコより甘い幸せ (牛込りみ)	26
風邪の日限定のあたし (奥沢美咲)	31
ドラムスティックは2本で1つ (大和麻弥)	38
お弁当は誰のため (氷川紗夜)	51
君を支えたい (松原花音)	56
ご機嫌斜めの歌姫さん (湊友希那)	63
離れていても繋がる空 (戸山香澄)	68
君の花言葉 (美竹蘭)	73
風邪引きはなんとやら (二葉つくし)	83

モカちゃんを照れさせたい（青葉モカ）

「パン〜♪パン〜♪モカちゃんのパン〜♪」

学校の帰り道、隣で先ほど買ったメロンパンを頬張りながら歩くモカ。

「モカって本当パン好きだよな。」

「と〜ぜん！モカちゃんとパンは切っても切れない関係だからね〜。」

小動物のようにパンを食べる。その姿が可愛らしくつい見とれてしまった。

「ど〜したの〜？」

「いや、なんでもない。」

不思議そうに顔を覗いてくるモカに悟られないように何とか平常を保つ。

「もしかして〜モカちゃんに見とれてたのかな〜？」

モカはニヤニヤしながら俺の顔を覗きこむ。何とか悟られないように顔を逸らすが彼女はお構い無しのようなのだ。

「そういえばぎ〜モカってよくパン食べるけどぎ、それで夕食食べれるの？」

「ほ〜。それを聞きますか〜。まあ食べれないことはないよ〜？モカちゃんの食欲はどこまでも続くからね〜。」

「凄いな。」

「それに〜カロリーは全部ひーちゃんに送ってるから大したことは無いんだよ〜？」

「ひまりちゃんも大変だなあ…。」

どうやら彼女がどれだけ食べても太らない理由はそれみたいだ（本当はただ太りにくいだけなんだろうけど）。でもひまりちゃんにカロリー送ってるっていうけどひまりちゃんも大して太ってるようには見えないんだよな。というかアレかな？送ったカロリーは全部胸にいつてるんじゃない？。それならあの部分が大きいことも納得できる。

「ね〜今何考えてたの〜？」

長いこと考えていたのかモカが俺に語りかけてくる。

「なんでもないよ。」

「ひーちゃんの胸とか〜?」

その言葉を聞いたとき思わず転けそうになった。そしてモカもそれを見ていて少しムスツとしていた。いや、間違っでは無いんだけど正解でも無いんだよな…。というか何でこの子はこうも勘が良いのだろうか。

「……むう。」

少しだけ拗ねたような表情をした。その後、暫く2人で歩いていたが突然モカが語りかけてきた。

「ねえ、やっぱり男の子って大きい方が好きなのかな〜?」

と突然モカが聞いてくる。

あれ?モカそんなこと気にする子だったっけ?というかなんだろう…。なんか真剣な顔してるけどそこが凄く可愛いんだけど。

「うーん…どうなんだろう。気にしたこと無かったからな。」

「そーなのー?」

「でもそんなこと関係なしに俺はモカのこと大好きだけどなく。」

「そっか〜。」

あっさりと俺の意見を受け入れ、さっきまでとはうって変わって笑顔になる。意外とこの子表情コロコロ変わるな。

「それにしても意外だったな。」

「何が〜?」

「モカがそんなこと気にしてたなんて。てつきりモカは自他共に認める美少女なんだから気にしてないのかと思つたよ。」

そういうと顔を赤くして明後日の方向を向いた。

「……バカ。」

「え?」

「カザっちには〜明日やまぶきベーカリーのチョココロネ奢って貰うからね〜。」

「なんで!?!」

「教えな〜い。」

そういつてスタスタと帰って行くモカ。いや俺何か悪いこと言っ  
たかな？そう考えながら俺は彼女の後を追った。

一方のモカは…

「まさかカザっちに一本とられるなんて…。」

俺に美少女と言われたことで嬉しさと恥ずかしさが頂点に達して  
いたらしい。

## 世界を越えて（丸山彩）

「あゝ今日も授業疲れた〜。」

高校から帰っている途中で独り言を溢す青年がいた。彼の名は『涼南風音』。何処にでもいる普通の高校生だ。

「全く…なんであの先生は最後の最後に授業に関係ない話するんだよ。しかもそれがノロケ話とかふざけてんのか。最近ようやく彼女出来たからって当て付けか？」

と、道の途中で独り言を呟く。もし周りで誰かに見られたら変な目で見られるだろう。

「……つたく。とりあえず癒しが欲しいしあそこに行くか。」

そういつて彼は1人歩みを進めた。彼の目的の場所は…

「さーて、バンドリのコーナーは…」

向かったのはアニマート。俗に言うアニメショップだ。

言い忘れていたが彼はバンドリが大好きなおタク。推しは丸山彩らしい。バンドリのCMを見て面白そうだなと思いプレイしてみたところドハマリしてしまい、それ以来推しのグッズやCDを買い集めるほどのおタクになったらしい。

「あつたあつた。何か新しいグッズが出てないかな〜。」

と、バンドリのグッズが置いてあるところを一通り見てみる。だがどれも自分が持っていたり目的の品ではなかった。

「今日も無しか…」と思ひ帰ろうとしたときコーナーの角にある1つの箱が目に入った。

それは…

「え？彩ちゃんのフィギュア？」

そこには普段置いてないフィギュア：それも推しである丸山彩のフィギュアがあった。

箱を手に取り周りを確認する。傷ひとつ無いところを見ると新品だろう。だが、普段この店にフィギュア関連は置かない上にあつたとしても昼までに来た誰かが買ってしまっケースが殆んどだ。

「夕方なのにまだ残ってるって……これは運命かな？」

と本人は特に深いところは気にせず2000円を払ってフィギュアを買って帰った。



家に帰った風音はフィギュアの箱を開けて本体をじっくりと眺めていた。

「いや〜本当に彩ちゃん可愛いなく。髪型もどんな感じでもいいしトチってる時も可愛いなく。あく結婚したい。」

「おっとそうだ。」とフィギュアを机に置きパソコンを開いた。彼は毎日ネットサーフィンをしている。と言つても閲覧するのはアニメに関する情報や面白そうな記事を流しているだけなのだが。

「バンドリの情報は無し。他も……めぼしい情報は無しか……。」

部屋にカチカチとマウスをクリックする音だけが響く。10分ほどして「今日は面白い記事が無いな。」と思い閉じようとしたとき、サイトの下の一つの文章が目に入った。

「別世界に行く方法……？」

いつも使うサイトにこれまでは無かったこの文字。怪しいと思いつながらをクリックしてみる。するとそこにはこう書かれていた。

『行きたい世界の詳細を無地の白い紙に書きます。アニメやゲームの世界の場合はタイトルを書いてください。紙の大きさはどれでも構いません。アニメの世界などで好きなキャラがいる場合はそのキャラ



ラクターの名前を書き、そのキャラに関係するフィギュアなどのグッズを枕元に置きます。そして書いた紙に更に☆マークを4角に書いて枕の下に引き午前2時に布団に入ります。すると眠気が生じるのでそれに身を任せて寝てください。

次に目を覚ますとあなたは自分が望んだ世界に行けるでしょう。

信じるか信じないかはあなた次第です。』

「いやなんだこの終わり方。なんでMr都市伝説のキメ台詞で終わったんだよ。」

パソコンを眺めながらそう呟いた。

「……にしても異世界にかく。これが本当なら俺もバンドリ世界に言つて彩ちゃんとかに会えるのかな。いや、でも向こうは俺のこと絶対知らないよな。……まあただの都市伝説だし……ね。」

そう言つてパソコンを閉じた。

この時彼は下に書かれていた文章を見逃していた…。

『このやり方で異世界に行けますが元の世界に帰ることは出来ません。また、別世界に行くと元の世界ではあなたは最初からいなかったことになります。』

やる際にはこの事を了承した上でお願いします。』



午前2時…

「疲れたな……。なんでこんなに難しい課題沢山出したんだよあの先公は……。」

課題を終えた風音がふと時計を見ると既に午前2時をまわっていた。

「もう2時か…そろそろ寝よ……2時?」

そこで昼間のサイトをふと思い出した。もしあれが本当なら…。

「まさかとは思うけど…試してみようか。」

白いコピー用紙に『バンドリの世界』『丸山彩』と書き、4角に☆マークを書く。そしてそれを枕の下に引き、今日買った彩のフィギュアを枕元に置いた。

「まあ…明日起きても同じ天井だろうけど。」

そうして風音は眠りについた。



ピ。ピ。ピ。ピ…

携帯のアラームがなり目を覚ます。そこは何時もと変わらないアパートの部屋だった。

「ほら何でも無いじゃん」

元々高校から訳ありで1人ぐらしをしていた為、普段からこうやってスマホのアラームで起きていた。

「……………あれ？フィギュアが無い。」

枕元に置いていた彩のフィギュアがなくなっていた。もしやと思いい枕の下を見ると例の紙も無くなっていた。

「……………まさかね。」

首を横に振り、服を着替えて朝食を食べると外に出る。

「それにしてもフィギュア無くなったのはショックだな…。あれやつとの思いで手に入れたのに…。」



しばらく歩いて見たもののあまり違和感はない。これではここがいつもの世界なのかバンドリの世界かわからない。まあ…バンドリ

世界なら商店街に行けば1発でわかるけど商店街どこかな…。と考  
えていた時、交差点の角で誰かとぶつかった。

「いたた…。」

「いつて…。……え？」

顔を上げて思わず驚きの声をあげた。

何故ならそこにいたのは

「すみません、大丈夫ですか？」

丸山彩だったのだから…。

(え? 何で彩ちゃんがここに……。まさか本当にバンドリの世界に来  
ちゃったのか?)

「あの…怪我はありませんか？」

「あつ…はい。大丈夫です。」

「良かった。すみません前見てなくて…。」

「いえ…。」

「あの…どうかしましたか? 私の顔に何かついてますか？」

「あ、いや…その…もしかしてパスパレの丸山彩さんですか？」

「はい! まん丸お山に彩りを! Pastel\*Palettesのふ  
わふわピンク担当、丸山彩でーす!」

ゲームやイラストなどでよく見るポーズをしてくる彩を見て風音  
は「本当にバンドリの世界なんだ…」と確信した。

「えつと…俺は涼南風音っていいます! ファンだったので会えて嬉し  
いですー!」

「知ってるよ?」

「そうかく知ってるのか…:…:…え?」

「だって…」

「この世界に君を呼んだのは私だからね。」  
その言葉と同時に風音の体に電流が走り、彼はそのまま意識を失った。



「知らない天井だ。」

風音が気がつくところには知らない部屋だった。それも明らかに女の子の部屋で可愛らしいぬいぐるみが置かれていた。

「気がついた?」

声をかけてきたのは丸山彩。バンドリの世界で彼が好きの子だ。

「丸山…さん?」

「彩でいいよ。」

「とりあえず…これはどういうこと?」

「そっか。説明してなかったね。」

そのまま彼女は語り始めた。

まず風音を知ったのは夢でのことらしい。最初はただの夢だと思っていたが、毎日彼の夢を見ているうちに好意を持ったという。

それから彼女は風音を探した。ネットで調べたり、多彩な情報網を駆使して毎日探した。警察が使う顔認証システムを使ったこともあるらしい。だがそれでわかったことはただ一つ。

『涼南風音はこの世界にはいない』ということだ。

彩は酷くショックを受けた。だがそれ以上にどうしても彼に会いたかった。

だからどうにか会おうとした。それで異世界に行く都市伝説を見つけた。でも彼女は夢にまでみたアイドルの願いをかなえた。それ

に彼に私たちの歌を聞いてもらいたい。だから彩がそつちの世界に行くことは出来ない。

しかし彼女は思い付いた。

だったら『彼をこつちに連れてくればいいんだ』と。

彩はこころの力も借りた。弦巻のデータベースを使い、あらゆる彼が閲覧するサイトに異世界への行き方を記載した。もちろん実際行けるのかは黒服の人たちの調査によつて確信へと変わった。

後は彼が来るのを待つだけ。彼が来ると彼女のスマホに反応が来るからそれにあわせて彩も行動を始めた。

「それでやつと風音くんに巡り会えたの。わかった？」

「え？それって…。」

「うん、君とどうしても会いたかったんだ。だから君に会うために私も頑張った。」

「……………」

「君も私のことを好きだつて思つてると知つた時は嬉しかったよ。だからきつと一緒になれると思つたんだ。」

「彩ちゃん…?」

「もちろん皆にも紹介するよ。私の恋人だつて。あ、でも日菜ちゃんや香澄ちゃんは君に興味持ちそうだし、千聖ちゃんやイヴちゃんは女優やモデルだから浮気させたら困るな。」

「そうだ！じゃあ念のため私のことを絶対に頭から離れないようにしておこつか。」

そう言いながら彩は風音にアイマスクとヘッドフォンを着けた。アイマスクには彩の写真が印刷されていて、ヘッドフォンからは「風音くん、大好き。愛してるよ。」という音声が始まることなく流れた。風音はなんとかとうとうとしたけど手足は完全に拘束されていて取り

外すことが出来なかった。

「ふふっ。必死に悶えてる姿も可愛い。」

でも駄目だよ。この世界には可愛い子が多いから君が他の誰かに捕られちゃう危険があるんだ。だから私のことをずっと君の中に刻み込んであげるね。」

「風音くん、ダイスキだよ。」

貴方の笑顔の為に（弦巻こころ）

「ハア…ハア…ハア…」

今俺は必死に逃げている。ただ前だけを見て。後ろを振り向けば終わりだ。足を止めても終わりだ。俺に残された道はひたすら走ること。どうにかしてこの迷宮から抜け出さないと…。

（ハア…ハア…そろそろ疲れが…。…。あそこに小さな穴が！とにかく今はあそこに身を潜めよう！）

見つけた隠れ場に身を潜める。暫くすると足音が聞こえてきた。

「いたか？」

「いや、こつちにはいない。」

「まだそんなに遠くまでは行っていないはずだ。手分けして探すぞ！」

パタパタパタ…

足音が消えたことを確認して一息ついた。

「くそ…なんでこんなことに…。」

壁にもたれ掛かりながら一人で呟く。だが理由はわかっていた。

そう、弦巻こころだ。

俺とこころは幼なじみでいつも一緒にだった。最初はお互い中のいい親友同士だったのだが、いつからかこころが俺に向けてくる想いに歪みが生じた。

中学の頃、こころは明るくてクラスでも上位レベルで人気があった。だが、彼女に恋をする男子生徒たちがこころと仲のいい俺に嫉妬して悪質ないじめや暴行を始めた。俺はこころに心配かけない為に必死でその事を隠していた。そして何とかいじめに耐え抜いた。

だがある日、俺をいじめていた奴らが忽然といなくなったのだ。

先生は「転校した」と言っていたのだがどうにも不自然だった。突然3、4人纏めて転校なんかするか？そう思っていた俺はこころを見た。しかし、その時俺の背筋に謎の悪寒が走った。

なんせあの太陽みたいな子が…黒い笑みを浮かべていたのだから…。

その後、高校の進路を探すため俺はネットを閲覧していた。俺はこころと一緒にのところにきたかったのだが、あいにく彼女の目指す花咲川女子学園は名前の通りの女子校。彼女は本気で目指していた訳だし無闇に振り回す訳にも行かないだろうと思いついた俺は他の共学校を受けすることに。彼女にもその趣旨を伝えたのだ。

だが驚いたのはここからだ。ある日突然花咲川女子学園が『本校は来年から共学となります』と発表した。そして俺には野球によるスポーツ推薦が来た。

その事をこころに話すと「良いじゃない！またあなたと一緒にいられるのはあたしも嬉しいわ！」と言ってくれた。よって俺はその推薦に乗ったのだ。

…しかし、俺は気がついていなかった。

大切な彼女が暗黒の太陽になり始めていることに…。

その後、高校に入学してからも女の子と接するだけでこころの顔から笑顔が消えた。俺に歯向かう者は気がついた時には俺を見るだけで怯えたりするようになった。

不審に思った俺はその事について色々調べることにした。そしてある日のこと…

「ねえ、あなたはもうしたら笑顔になってくれるのかしら？」

彼女が聞いてきた。

「最近あなたは笑顔じゃない時が多くなってわ。それはなんで？」

「えつと…なんか凄く不自然な事が起きててさ。ほら、この間俺とぶ



つかった奴が次の日には俺を見るだけで怯えたりするし…。」

「つまり…原因はその人にあるのかしら？」

「原因っていうより…」

「大丈夫よ！私が何とかしてあげるわ！」

「あなたの笑顔を曇らせる存在は排除しなきゃね…。」

次の日…彼は学校から姿を消した。

「ごころ…」

「どうしたの？今日も浮かない顔してるわね。」

「今日いなくなった人なんだけどさ…。」

「彼がどうかしたの？」

「いや、なんで突然いなくなったのかなと…。」

「……なんで？」

「え？」

「あなたに笑顔でいて欲しいから…あなたの笑顔が見たいから私は彼をこの町から消したのに…どうしてあなたは笑ってくれないの？今度は何があなたを曇らせてるの？ねえ…。」

「ドウシテ？」

この時の彼女は俺が知っている弦巻ころろではなかった。  
彼女は俺が知らないうちに狂っていたのだ。



それから俺は彼女から逃げるように部屋から出た。だが彼女の護衛である黒服は俺を捕らえんとしていた。それにここは弦巻家の屋敷。かなりの大きさがあるため素直に外に出れる訳ではなく、こうやって屋敷の中で黒服らと鬼ごっこをしていた。

「どうしてしまったんだよころろ…。」

だが俺は今捕まる訳にはいかない。別にころろが嫌いになった訳じゃない。だが今はどうしようもなくころろが怖い。今彼女の元に戻るときつと…何かが崩れる。そんな気がした。

今はどうにかここから抜け出さないと…。そう思って辺りを見回すと近くに小さな抜け道を見つけた。もしかしたらここから抜け出せるかもしれない。そう思い歩みを進める。

それから歩くこと数分。少し暗いが開けたところに出た。奥には明かりが見える。もしかしたら外に出られるかも知れない。少しだけ希望を抱き走り出した。

だが

「やつと来てくれたのね風音！」

その希望は砕けた。あの道はころろの部屋に繋がっていたみたいだ。

「アハハハ…」

「どうして逃げるのかしら？あたしはあなたに笑顔になって欲しいだ

けなのよ?」

「だとしても…あそこまでやる必要は…」

「あるわよ。」

「こころは俺の前に来た。そして話を続けた。

「あたしは世界を笑顔にしたい。それ以上にあなたを笑顔にしたいのよ。もしこの世界のせいでああなたが笑顔になれないならこんな世界はいらないわ。」

「え?」

「風音は昔言ってくれたわよね?あたしが太陽みたいだつて。

「じゃああたしが太陽ならあなたは月。あたしがあなたを照らしてあげるわ。だから心配しないで…。」

「この時俺は全てを悟った。

彼女はもう俺の知ってる太陽じゃない。

「あたしに全てを任せて。ね?」

その輝きを俺が濁らせたから…。

あたしは風音のことが好き。

あたしと風音は昔からずっと一緒に兄妹のように仲が良かった。

「風音、あたし達ずっと一緒にいられるかしら?」

「もちろん、ずっと一緒だ。」

嬉しかった。その時からあたしは心に誓った。

風音の為ならどんなことでもすると。

ある日のこと、何時ものように風音と一緒に学校に行くと教室で3人ほどの男子生徒に声をかけられた。

「弦巻さんおはよう！」

「おはよう！」

あいさつをしあった。ただそれだけだった。でもあたしは見逃さなかった。

彼らを見たときから風音が少しだけ怯えているような表情をしたことに。

「ねえ、風音。どうかしたの？」

「えっ？……いや、なんでもない。」

「…っ…そう？…ならいいのだけど…。」

一瞬だが彼の笑顔が曇った。そして先程の男子生徒を見るととても笑っていた。まるで何かお楽しみがあるかのように。

放課後となり、あたしは風音と一緒に帰ろうとした。でも気がつけばそこに風音はいなかった。

彼を探した。彼がよく向かう図書室や自販機のところも見に行っただけどそこにいなかった。お手洗いだろうかと思い教室に戻って風音を待つことにした時、裏の方から物音が聞こえた。それが気になって音の法に向かうとそこには……

「オラッ！いい気分だな！毎朝毎朝弦巻さんと仲良くしゃがって！」  
「さっさと吐いたらどうだ？どんな手を使ってこころちゃんを脅迫してるのか。」

「ガハッ…俺は…何もしていない。ただ…こころとは幼なじみなだけ嘘ついてんじゃねえ！」

男子生徒の1人は彼が言い終わる前に更なる追撃をかました。

「脅迫なんかしないとお前がこころちゃんやんと仲良く出来るわけねえだろ。お前みたいな底辺の陰キヤがよお！」

「さっさとこいつ始末して弦巻さん助けようぜ。彼女にふさわしいのは俺たちみたいなの高貴な奴らだからな。まあこんなやつパパに頼めば権力でどうにでもなるしな。」

そして男子生徒たちは笑いながら立ち去っていった。

許せない。

彼らが憎かった。

こんなことをしてまで風音を苦しめていた彼らが。そして風音の笑顔を奪っていたことが何より許せなかった。

あたしが風音の傍に行くと彼は気を失っていた。体の至るところに痣があることからかなり前からこんな仕打ちを受けていたのだろう。そう思うと心の中の黒い感情が一気に沸き上がってきた。

だからあたしは…

「風音、安心して。」

「あなたはあたしが守るから。」

彼を守ること  
復讐を誓った。

その後あたしはその男達に復讐をした。といっても暴力的なもの

ではない。

彼らは一人ずつ精神的に追い詰めた。彼らが最も苦手とすること、嫌いなものを調べあげそれらを突きつけた。彼らは日に日に追い詰められていき、やがて耐えられなくなり転校していった。ここよりもうんと遠いところに。

因みにあたしが実行したことは誰も知らない。誰がやったのか、いつ実行したのかそれすらもわからないほど巧妙な手口で行ったからだ。

こうして風音を苦しめる癌はいなくなつた。彼も笑顔になれる。そう思つた。

数カ月後、またしても彼が笑顔じゃないときがあつた。どうやら進路のことで悩んでいたらしい。聞くところによるとあたしが行きたい『花咲川女子学園』は女子校、男子は入れない仕組みになっていた。そのため彼は「こころと一緒にはいられないかもな。」と言つた。それは嫌だつた。何よりもし違う学校に行つて風音が他の女に盗られることが嫌だつた。

だからあたしは弦巻の力で花咲川女子学園を花咲川学園に変えた。こうすることであたしと風音は一緒にいることが出来、彼の笑顔を守ることが出来る。彼の笑顔を守れるのはあたしだけ。だから側についてあげなくちゃ。

高校に入ってから  
その後も彼の笑顔を脅かすものはいた。この度にあたしはその脅威を排除した。

その一人として風音にぶつかつて怪我をさせた男子生徒を精神的に追い詰めた。流石に今回は転校までは追い詰めなかつたけど2度と彼に辛い想いをさせないように恐怖を刻み込んだ。

だけどその男は尚も風音を苦しめた。風音を見るだけで怯えて逃げ出したのだという。そして噂では彼がなにかをしたという根も葉もないものが上がり始めていた。

それを聞いたあたしはすぐにその噂を取り消し、原因となった彼を再び追い詰めた。そして彼はこの町からいなくなった。もう2度と戻ってくることは無いだろう。

これで風音が笑顔になってくれると思っていた。だけど…。

彼は笑顔になってくれなかった。

どうして？ 障害となるものは全て排除したのに。

どうして？ 何で？ 今度は何が貴方の笑顔を曇らせているというの？

「消さなきゃ、風音の笑顔の為に。」

だからあたしは…。

「風音、心配しないで。あたしが守ってあげるから。」

彼のために全てを捧げ続けるのだった。

## 君と見る星空（氷川日菜）

放課後。それは学生の皆が授業から解き放たれて自由となる時間。生徒たちはそれぞれ部活に行ったり、家に帰ったりしていた。中には残って勉強をするものもいる。

そんな中で授業が終わったことにより机に伏せている者がいた。1日の疲労により暫く伏せていてやつとの思いで顔を上げる。

「風音くん、屋上いこー！」

そんなとき1人の少女が彼に声をかけた。

「この間ね、るんってくる本見つけたんだ！一緒に読もっ！」

「わかったから少し休ませてよ日菜…。」

こちらとらそろそろ体力的にヤバいから。少し寝てないと体が持たないから。

「そつかく…あつ！いいこと考えた！」

「良いことって…日菜の言う良いことって俺にとってろくなことがないn」ポテトLサイズ奢るから来て？」速攻行かせていただきます！」

と、いうわけでポテトLサイズに釣られた俺は日菜に引っ張られるがままに屋上へ連行された。だって仕方ないじゃない、ポテト美味しいんだから。氷川姉妹…というか姉の方が好きになる気持ちも十分かるわ。

一方

「ハックション！」

ライブハウス『CIRCLE』にて練習をしていたRosellia。

その中のギター担当、氷川紗夜は練習中に大きなくしゃみをしてしまった。

「どしたの紗夜？風邪？」

「いえ、そういう訳ではないんですが…。」

「紗夜さん大丈夫ですか？」

「私…何か温かい飲み物買ってきましようか…？」



「いえ、今のは風邪というより誰かに噂をされたような気が…。」  
「紗夜が体調を崩すとは思えないけど…。とにかく風邪には気をつけて頂戴。」

「はい、わかりました。」

こんなことがあったとか。



場所は変わって羽丘高校の屋上。

「ねっ！この内容るんっ♪って来るでしょ？」

「…まあ何となくはわかるけど…天体関係ないよねこれ…。」

屋上の天文部の部室に来て数分がたった。来たのは良いんだけど日菜が面白いと言って出してきた本はどれも天文とは関係のないものばかりだった。

「えくでも面白いじゃんこのオリジナル星座占いかさく。あ、この『お手製夜空の作り方』とか良くない？」

「いや、それ前にやるために日菜が墨汁ぶちまけようとして俺が止めたやつじゃん！」

「そうだったっけ？」

「そうだよ。」

「全く…」と頭を抱えながらも日菜に勧められた本を読む。確かに内容は面白いしあの日菜が興味を持つのもわかる。

「あっ！ねえ風音くん！これ見てよ！」

日菜が身を乗り出して一冊のノートを見せてきた。

「流れ星の見える丘？」

そこには『実際に調べた！流れ星が最も綺麗に見える場所！』と書かれていて、この付近の丘がそのスポットらしい。

「だからさ、今日の夜行ってみない？」

「本当急なんだけど…。」

「いーじゃんいーじゃん！それに今日は結構星見えるからさ！天文観測も出来ると思うんだよね！」

「しよーがないか…。」

こうして俺たちは今日の8時、その丘で待ち合わせるようになった。



「ここかく。」

「確かにいっぱい星が見れるね。」

例の場所に来た俺たちは夜空を見上げていた。都会だと空気汚染とかの問題でちよくちよく空が綺麗に見れないときがあるが、そこは1つ1つの星がそのままの輝きで存在していた。

「あ、あれ白鳥座じゃない？」

「ほんとだ。じゃああれが琴座で…あっちが牡牛座か。」

「早速夏の大3角形見つけたね！」

「そういやもうすぐ七夕かく。日菜は何か願い事とかあるの？」

「うーん…思い付かないかな。おねーちゃんとは最近上手くやれてるし…。」

「そっか。なら良かった。」

日菜はお姉さんの紗夜さんとはもともといざこざがあつたがどうやら最近2人とも上手くやっっているみたいだ。それを聞くと何故か自分の事のように嬉しくなった。

「あー流れ星！」

そんなことを考えてると日菜が空に指を指しながら言った。

「……見逃した…。」

「あはは…まあきつとまた見れるって！」

「そうかな…。」

そう言った矢先に空を見ると2つの流れ星が見えた。日菜もそれに気づいていたみたいだ。

「ダブル流れ星だね。」

「そういや流れ星に願い事をするって叶うって本当かな？」

「さあ？まあそっちの方がるんっ！って来て楽しいけどね。」

「因みに日菜は何かお願いしたの？」

「うーん…秘密！」

「秘密って…。」

「そう言う風音くんは？」

顔を近づけながら日菜は聞いてきた。

「そうだな…これからも日菜ともっと仲良くできますように…とか？」

「え…？」

試しに本心を言ってみたところ、単調な返事をしたまま黙ってしまっただ。

「日菜？」

「えっ…何…？」

「どうしたの？顔赤いけど…？」

「~~~~!!風音くんのバカ!!」

「ウエ!!」

そう言ったきり日菜はそっぽを向いてしまった。

（何で!?!）

その理由がわからないまま、しばらくの間、俺は1人苦悩するのだった。

一方…

（何でそんなことさっさと言っちゃうの…。）

顔を赤くしていた日菜は風音から顔を背けていた。だが別に嫌いになったからではないようだ。

（言えるわけないじゃん…『これからもずっと風音くんの側にいられ

ますように』って願ったなんて…。)  
そんな2人を見守るかのように夜空では夏の  
大3角形が綺麗に輝いていた。

## チョコより甘い幸せ（牛込りみ）

人の1日は朝起きて、飯を食って、職場や学校に行って、仕事や勉強をして、終わったら家帰って、課題があつたらそれをやって、風呂入って、飯食って寝る。だいたいの人がこんなサイクルだろう。

もちろんそれは俺も例外ではない。

社会人である以上、働くことは責務となる。そしてそれを勝手に破るわけには行かない。

だが…

（眠い…。まだ起きたくない…。）

どうしても疲れと睡魔には勝てないものだ。社会人になり、親元を離れて暮らしている為、基本的に生活費等は自分の給料から払っている。そしてその給料を貰うためには働かなくてはならない。その為朝から夕方まで働きづめな訳だ。時々残業もしなければならぬ為溜まる疲労は計り知れない。疲れを取るには睡眠が大切だと言われる。だが、どれだけ寝ても回復量よりも疲労の方が上回ってしまう。（もう5分だけ…目覚まし時計も繰り返すように設定されてるしもうちよつと寝ても大丈夫かな…。）

そう思い再び眠りにつこうとした。

その時…

「風音くん、起きてー！」

「ん〜。」

俺の体をゆさゆさと揺らしながら耳に可愛らしい声が聞こえてきた。

「…まだ眠い…よ…。」

「ダメ！起きないと朝ごはんなしだよ？」

「んん…。」

重い瞼を開けると眩しい光と共に最愛の人の顔が見えた。

「やつと起きた。おはようー！」

ニコツと笑いながら寝起きの俺に尊死という更なる眠りにつかせ

るような可愛い表情を向けてくる彼女、牛込りみ。

「りみ…おはよ…。」

「朝ごはん出来てるから一緒に食べよう?」

「うん…。その前に顔洗って来るよ…。」

「じゃあ待つてるね。」と言つてりみは部屋を出る。そのままもう一眠り行きたいところだったのだが、流石にりみに怒られると思えばベッドから出て、洗面台で顔を洗い眠気を覚ます。そしてテーブルに向かうとそこには炊きたてのご飯、味噌汁、玉子焼きにウインナー、そしておひたしと朝から豪華な食事が待っていた。

「風音くん、早くしないと冷めちゃうよ?」

「うん。」

二人とも椅子に座ったところで「いただきます。」と手を合わせて食べ始める。そして手始めに味噌汁を飲む。口の中でほどよい味噌の風味が広がる。

「うん、美味しい。」

「ホントに!?良かったあ〜。」

俺の言葉を聞きほつとしたようにりみが呟いた。そのまま箸を玉子焼きに伸ばし、口に運ぶ。これもまた甘めの味つけで俺好みだった。

「りみ…また料理の腕上げた?玉子焼き前よりも美味しくなってるよ。」

「えっ!?そう…かな…?」

「うん、そうだよ。」

俺が褒めるとりみは恥ずかしそうに照れていた。その様子も可愛くてじつと見ているとさらに顔を真っ赤にした。

朝食を食べ終わると歯を磨き、家を出る準備をして玄関に向かう。すると奥から「ちよつと待って!」とりみが慌てて出てきた。

「はい、これ持っていて。」

彼女が差し出してきたのは弁当箱。恐らく早くに起きて朝食を作りながら頑張つて作ってくれたのだろう。

「おお…ありがとう!これで今日も頑張れそうだよ!」

「うん！それと……いい……かな？」

顔を赤くしながら恥ずかしそうに呟いた。その瞬間、俺は彼女が何を求めているのかすぐにわかった。

「わかったよ。」

そう言っつりみの唇に自分の唇を重ねる。いわゆるキスというものだ。少したつて唇を離すとまだ顔を赤くしていたが、可愛い照れ笑いを向けてきた。

「ありがとう……。頑張っつね。」

彼女の言葉に背中を押され、俺は家を出る。

今日も彼女の為に頑張りますか！

そう気合いを入れ直して、俺は会社に向かった。



時刻は午後7時。

今日も少しの残業により、定時には帰れず……といった若干社蓄のような仕事を終えてようやくこの時間。因みに今は電車に揺られながら帰路についている。

『次は○○○○、○○です。お降りの際はスマホ、傘などの忘れ物の無いようにご注意ください。』

俺が降りる駅が近づいて来た。

かなり眠く、正直今すぐ寝てしまいたい位だが、ここで寝たら電車を乗り換えないといけないし、帰りを待っているあの子が心配するだろう。俺は重い瞼を頑張っつて開けていた。家につく前に眠気覚ましにモン○ターでも買っつて飲んどくかな。

そこから到着した駅に降りて、近くのコンビニで眠気覚ましのエナジードリンクを買っつて飲む。少し刺激が強いがお陰でしっかり目が覚めた。そのまま歩くこと数分。すると愛しの彼女が待っている一軒家が見えた。今頃りみは何をしているのかな？と思ひながらドアノブに手をかける。

「ただいま。」

俺の声が聞こえたのかりビングからりみが早足でこっちにも来た。

「お帰り！遅かったから心配したよ？」

「ごめん、残業入っちゃって…。」

「そっか…。今日もお疲れ様。」

俺の持ってた鞆を手に取り、一緒にリビングに向かう。

「ご飯もお風呂もできてるけどどうするの？」

「じゃあ…お風呂入って来ようかな。」

「わかった。その間にご飯温め直しておくね。」

それからしばらくお風呂に浸かって疲れをとり、風呂から上がって服を着替えてキッチン付近に向かった。するとそこには頑張った料理を盛り付けして、テーブルに配膳している姿があった。

「…あつ、ご飯もうすぐ出来るから座って待ってて。」

俺に気付き、りみはそう言った。だけど流石にやらせっぱなしというのも良くないだろうと思い俺は食器棚から数枚お皿を取り出した。「手伝うよ。」

「えっ？でも風音くん疲れてるんじゃない？」

「それはりみもでしょ？2人でやった方が早く食べれるしね。」

「じゃあ、お願いしようかな。」

こうして、協力して準備を終えた俺たちは彼女が作った夕飯にありつくことになった。

「…うん、この肉じゃがが…今まで食べた中でも一番美味しいよ。」

「ふふっ…ありがとう。」

嬉しそうに俺を見る彼女の笑顔を見るとこっちまで嬉しくなってきた。

どれだけ仕事が辛くても、この世間がどれだけ理不尽なものでも、彼女といるとそんなことは些細なことに思えてしまう。

俺はりみを支え、りみは俺を支えてくれる。今の俺は…世界中の誰よりも幸せだ。誰に聞かれてもそう胸を張って言えるくらいに。

「どうしたの？私の顔に何かついてる？」

「ううん、りみがかわいいなあって思っただけ。」

「かわっ…!?可愛いって…」



「あっ、照れてる。」

「も〜！意地悪しないでよお！」

「ごめんごめん！でも可愛いつて思ってるのはホントだって！」  
りみ、いつもありがとう。

そしてこれからもよろしくね。

## 風邪の日限定のあたし（奥沢美咲）

ピピピピ…

脇に挟んでいた体温計を出し、数値を見る。そこには37.6と記されていた。

「風邪引いちゃったか…。」

体温計を枕元に戻し再び横になる。

朝起きると体に違和感を感じた。なんだか重力をそのまま背負っているように重かったのだ。何とか起き上がり、支度をしようとしたが今度は動く度に頭痛がした。

キッチンにいた母に今の状態を話すと体温計を渡された。そして計るとこの結果だ。

「美咲、どうだったの？」

「うん、風邪引いたみたい。とりあえず今日は学校休むよ…。」

そう言つて再びベッドに横になる。朝ご飯は作ってくれているんだろうけど今は食欲が湧かない。作ってくれた母に申し訳ないと思いつながらあたしは天井を眺めていた。

数分後、部屋をノックする音がして誰かが入ってきた。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

妹の華燐が部屋に入ってきて私の元に近づいてきた。

「うん…とりあえずなんとかね。」

「ごはん食べたの？ちゃんと食べないと元気にならないよ？」

「そうだね…。じゃあ…後で食べとくよ…。」

「お母さんが机の上にお粥作って置いてるって言ってたから欲しくなったら食べてね！」

「ありがとう。ほら、華燐も学校行かないと遅刻するよ？」

「うん！それじゃあ行つてきまーす！」

そう言つて部屋から出ていった華燐はそのまま学校に向かった。

その後、台所に行くのと鍋に入っていたお粥が置かれていた。お茶碗に一杯のお粥をよそつて食べる。食欲はあまりないけれど、風邪を引

いたときに食べるお粥はなんだかおいしく感じる。食べやすくて水分もすっかり取れるから食欲がなくても食べやすいのもあるんだろう。

お粥を食べた後、家にあつた風邪薬を飲んで再びベッドに横になった。お腹が膨れているからか、早くから眠くなってきた。

そのままあたしは睡魔に促されるように眠りについた。



どれだけ寝ただろうか？

最早時計を見る気力がない。まだ体力が回復してないからか、それとも長く寝ていたことで逆に体力を消耗してしまったのかわからない。まだ頭は痛いし、体も熱い。

夏風邪を引くと何時もよりも辛くなると聞いたがまさに今それを実感している。部屋の気温も暑くなっていて扇風機かエアコンをつけて温度を調節しようとしたが、それすらもままならないようだ。「こんなときにこころか…あいつでも来てくれればな…。」

今ここにいない人たちのことを呟きながらブーツと天井を眺めていた。

いくら学校を休んでいるからとはいえ、こんなときに都合良く来る筈がないのに。そんなことを考えながらも一度瞼をおろした。いくら横になっているとはいえやっぱり頭痛や体温上昇は感じてしまう。こうなったらやっぱりおとなしくなにも考えずに寝ていた方がいいのだろう。そう思っていると、意識が遠くなるのを感じた。もしかして、ずっと気温の高い部屋にいたから熱中症も上書きされてるのではないかと思つたが、最早考えることすら面倒くさくなりそのまま意識を手放していた。

「美咲く？…入るぞく？」

なんだか聞き覚えのある声が聞こえた。

まるであたしの心情を読み取って駆けつけたかのように来たその人は…。

「おい、鍵空いてるぞ。無用心だn……うわっ、蒸し暑っ！」  
その声を聞いて安心したのか、あたしの意識は遠くなった。



「なんだよ……。新車のサウナか？」

学校で美咲が風邪をひいて休んだことを聞いた俺は授業が終わると真っ先に美咲の家に向かった。呼び鈴を押したものの返事がなく、ドアノブを捻ると鍵かかかって無かったのでそのまま上がり込んだが、凄く暑い。サウナにでも入ったかのような温度だ。

えっ？何で俺がしれっと美咲の家に入り込んでいるのかって？それは俺が美咲と幼なじみだからだよ。昔からお互いに遊びに行つてはどちらかの家にお邪魔していたから別に今更……って感じだし。なんという便利な設定

それはさておき、今は美咲の搜索が先決だ。早くしないと手遅れになるかもだし……えっ？風邪じゃそんなにならないだろって？いや、風邪を舐めてはいけない。どっかのフルペンネームが某V t u b e rの名前にそっくりな字書きは以前夏風邪拗らせて3日程風邪と格闘した上に治つてからも1週間ほど喉が痛かつたらしい。まあ、どうでもいいけど。

「それより美咲は……。」

そう言いながら美咲の部屋の扉を開けた。するとそこには風邪と暑さで横になつている美咲がいた。とりあえず部屋の窓を開け、換気をしてから美咲の方に向かう。

「おい。大丈夫か……？」

ベッドの傍で声をかけるが一向に返事はない。枕元を見ると熱冷ましシートが剥がれていたの、彼女のおでこに手を当てると結構熱かった。

「なんか置いてやらないとな……。」

とりあえず持つてきていたタオルを拝借した氷と水を洗面器に汲み、冷やしてから美咲の頭に置く。冷えピタ買ってくれば良かったな

と思うものの後の祭りだった。

暫くすると美咲が気がついたのかゆっくりと目を覚ました。

「うん…?」

「あつ、起きたか?」

声をかけるとじーっとこちらを見つめて何も喋らない状態が続いていた。

「か…ぎね…?」

「どうも風音です。」

「お見舞い…来たの?」

「モチのロン。」

そう言うとなんだかホツとしたようにこつちを見ていた。うん、何だろ。風邪で頭回ってないからなのか、やけに素直である。そんなことを考えてると「ぐううう」と腹の虫が泣く音がした。俺のは無いため、誰のかは直ぐにわかった。

「腹減ってるのか?」

「…うん。」

「何か食べれるものは…お粥でいいか?」

「お粥なら…朝食べた残りが台所にあるけど…。」

「わかった。ちよつと暖め直してくるから待つてろ。」

そう言うっておれは台所に行き、お粥が入っている鍋を見つけ、ガスコンロでそれを暖め直す。そして大体暖かくなるとお盆に鍋敷きを置き、その上に熱々の鍋を置く。後は美咲のところまで運ぶだけだ。

「ほら美咲、持ってきていたぞ。」

そう言うって目の前の机に鍋を置き、美咲に語りかける。上半身は起き上がった。しかし、当の本人は俺が渡しているレンゲを受け取ろうとしなかった。

「おい、大丈夫か?欲しくないなら無理しなくても…食べさせて。」そうか、なら食べさせて…は?」

突然美咲の口から発せられた衝撃的な一言。それに少し困惑していた。まさかこいつ、暑さと熱さのあまり体調不良起こして頭ヒヤッハーになってるんじゃないよな?皆何言ってるかわからないって?

大丈夫、俺もわからない。

「ほら、食べよ。」

「……あーんは？」

「葉？」

「あーんしてよ。」

うん、何だろ……。なんか訳わかんねえわ。美咲があーんしてくれって言うてんだぞ？あのぶつきらぼうでクーデレの美咲があーんだぞ？もう、こっちの頭がヒヤッハーしそうなレベルのギャップ萌えがすごいんだけど。

「……あーん……」

「んっ……」

美咲は俺が掬って差し出したお粥をゆっくりと食べていた。

「美味しい……。何か加えた？」

「いや、暖め直したただけだけど？」

「でも朝食べた時より凄く甘くて美味しい。」

「……お前マジで大丈夫か？」

なんか思考回路だけじゃなく味覚も回らなくなってる可能性が出てきた。

それからしばらくしてなんとか美咲はお粥を食べ終えた。まあ、全部俺が食べさせてあげただけだ。

「ふう……。なんか美味しくてちよつと食べすぎちゃったかな？」

「じゃあこれ飲んで落ち着いたら早く寝ろよ？」

そう言っって持ってきていた風邪薬とあろはすを渡す。俺の言葉通り薬を飲んだ後はおとなしく横になってくれた。

「じゃあ俺は洗い物してまた様子見に来るわ。」

とりあえずは大丈夫そうだし、そろそろおばさんも仕事から帰ってくるし俺はおいとましようかなと思っっていたら、美咲は立とうとした俺の服の裾をちよこんと引っ張っていた。

「ねえ……もうちよつと一緒……いて……？」

と、普段の美咲が言いそうにない一言を熱で火照った表情で言われた。

いやだからマジでヤバイよこの子。普段がちよつとクーデレかんあるだけに風邪引いたときのギャップがヤバイもん。もう普段興味を示してくれない猫が突然すり寄って来るくらいの破壊力あるもん。あ、クーデレと言えは某赤メツシユさんがいるけどあの子も風邪引いたらこう言うことになるのかな？だとしたら破壊力ダイナマイト越えそう。とりあえずモカにでも聞けば：「あだだだだだ!」

考え事していると美咲が俺の皮膚をつねっていた。

「……他の女の子のこと考えてた…?」

「いや、ない。断じてない!」

「……………そう?」

なんて勘が良いんだこの子は!

とうるか何さっきの?嫉妬?嫉妬なの?ちよつとお兄さん聞きたいんだけど?

「…風音……いかないで…。」

なんか泣きそうな目で言われた。ちよつとこの子熱でやられ過ぎて幼児退行してませんか?

まあ…形はどうであれ俺もここまで言われて見捨てるほど男が廃っちゃいねえからな。

「わかったよ。俺が傍にいてやるよ。」

「ありがとう…。」

そう言っ俺の手を握った美咲はしばらく俺の顔を見た後で眠りについた。俺も美咲につられたのかそのまま眠ってしまった。

後、美咲が寝た後でこっそり洗い物行こうかと思ったらなんか握力やばくて全然離してくれなかった。なんかもう本当は起きてるんじゃないの?…つてくらいに。



「んっ…?」

あたしは目を覚ました。

確か風音がお見舞い来てくれたことに安心して眠っていたのだっ

た。それとなんか少しの間良い夢を見ていた気がする。

ふと横を見るとそこにはベッドにもたれ掛かるように寝ている風音がいた。そして彼の左手はあたしの右手に繋がれている。近くを見ると空っぽの器やグラスがあり、今まであたしを診ていてくれたのは直ぐにわかった。そう思うと繋がれているこの手が凄く暖かく感じた。

「……風音、ありがとう。」

「大好きだよ。」

因みに捕捉話すると、風音が看病に着てからのあたしの様子をじっくり教えてくれた。最初は「そんなこと無いでしょ」と思っていたのだが、夢のことを思いだし何も言えなくなった。

「おい美咲、どうした？」

「うるさいこの変態バカ。」

「ナンデ!？」

どうやら、風邪の時以外で素直になるのはまだまだ難しそうです。



## ドラムスティックは2本で1つ（大和麻弥）

○月□日

ジブンはパスペレのスタジオで倒れ、病院に運ばれました。目が覚めるとジブンは病室のベッドで寝ていて今置かれているジブンの状況がいまいち把握出来ませんでした。

お医者さんの説明によると体が負荷に耐えられずに倒れ、今に至る…とのこと。つまりは過労です。

何故過労になったかというところ、パスペレのステージ用の機材の殆どが故障してすぐに修理に取りかからないと間に合わなくてジブンも自ら協力しました。

ですが思っていたより壊れ具合が深刻で直すのに骨が折れるところばかりでした。スタッフの皆さんも根を上げる程に。ジブンはパスペレのバンドの練習や個人の仕事を終えた後でスタッフさんたちを手伝っていました。なので休息も思うようにとれてなかったんです。その事を見かねて皆さんも心配の声をかけてくれたのですが「ジブンがやらなきゃ」の気持ちが強くなってついつい無理をして…：…こうなつたと。

千聖さんにはきつく怒られましたし、彩さんに日菜さん、それにイヴさんも凄く心配してくれました。本当、皆さんには申し訳無いです…。

因みに今はだいぶ体調も良くなりましたが、千聖さんが念のためと言って検査入院という形でベッドの上なんです…。まあ、ライブの方はジブンが退院してから間に合うように調整させているのが不幸中の幸いでしょうね。

パタン、と読んでいた本を閉じて天井を見上げる。流星に2週間も入院していると暇で仕方ない。ああ…：スタジオの機材が恋しいです…。

「ねーねー。君も暇してるの?」

天井を見てると声をかけられました。声がした先を見るとそこに

は隣のベッドに寝転がっている男の子がいました。

「えっ？あ…まあ…そういつたところでしょうか…。」

「あ、急に話しかけてごめんね？迷惑だった？」

「えっ？いやいや！そんなことは無いですよ！」

「そっか。それなら良かった。」

まあ…突然話しかけられて少し困惑はしましたが…。でも不思議と悪い気はしませんでしたね。

「君っていつからここに居るの？」

「えっと…ジブンは2週間前からみたいです。」

「そっか。俺は1ヶ月くらいここに居るんだよね。」

遠い目をしながら話していたその子は「そう言えば」と言いながら再びジブんに振り向きました。

「自己紹介まだだったね。俺は涼南風音。よろしく！」

これがジブンと彼の…忘れられない出会いでした。



「……病院食って味薄い。」

お昼時、隣のベッドで食事をしていた風音くんが愚痴を溢していました。

「ねえ麻弥ちゃん……って食べるの速くない？」

既に自分の分の食事を終えていたジブンは空になった食器を横のテーブルに置いて本を読んでいた。

「そうですか？というか風音くんの方こそ食べるの遅い気がするんですが…。」

「だってさ〜味薄くて箸が進まないもん。もうちよつと塩つけてくれてもいいのに…。」

「でも病院側もちゃんと健康を考えて、身体に良い食事を作ってくれてるんですから食べなきゃ失礼ですよ。」

ジブンがそういうと風音くんは渋々ご飯を食べていました。

数分後、ようやく食べ終わったみたいでまたジブんに声をかけてきました。

「なに読んでるの？マンガ雑誌？」

「これですか？実はこれ機材のカタログなんですよ…。」

そう言うのと風音くんはベッドから起きてジブンの方に来ました。本が見たいのかと思ったジブンは彼にも見やすいように机に広げました。

「フンフン…なんかいっぱいあるけど何か違いとかあるの？」

「ありますよ！ドラムはそれぞれ細かい違いがありますよ、中でもこれなんかいい音出すんですよ。もう心に弾ける感じの音でジブン大好きなんです！」

「そうなんだ。」

彼が反応してジブンは思わず「やってしまった！」と思いました。ついつい熱が入ってアツク語りすぎてしまいました…。

「ねえ麻弥ちゃん…俺にもドラムのこと色々教えてよ。」

「えっ？」

思いがけない風音くんの言葉にビックリしてしまいました。

「だって、麻弥ちゃんが凄く楽しそうに話すんだもん。だから俺も詳しく知りたいんだ。」

笑いながら彼はそう答えてくれました。その時の彼の笑顔を見ているとなんだかジブンまで嬉しくなっちゃいそうでした。

「ジ…ジブンで良ければ！」

そこから先はジブンがドラムについて雑誌を見せながら色々教えていました。風音くんもなんだか凄く楽しそうでした。そしてジブンもなんだか楽しくなってきました。

このままずっとこの時間が続いて欲しい…そう思う程に。



数日後、ジブンが退院する日がやって来ました。もともと検査入院ということだったのでそんなに長くいる予定は無かったんです。その事を風音くんにも話したところ「そっか…。」とだけ言ってそれっきりになっています。

「風音くん？」

「……何？」

「もし良かったらなんですけど……これから時間があるときは遊びに来てもいいですか？」

そう言うのと毛布にくるまっていた風音くんが少しだけ頭を覗かせてきました。

「……来てくれるの？」

「はい！風音くんさえ良ければ！」

「じゃあ……お願いします。」

そう言ってもまだ顔を窓に向けたままでした。でも布団から出た耳は少し赤くなってるように見えました。



「それですね。今度発売されるドラムなんですけど……」

ジブンが退院してから1週間が経ちました。パスパレの練習とかが無いときは学校帰りによくここに足を運んでいます。今は風音くんに新作ドラムの魅力について色々と語っているのですが……

「えっ？ドラムって音違うって聞くけどどうやって音変えてるの？」

「あー、それはですね……」

このように彼も興味津々な様子で話題が尽きないんですね。ジブンの趣味に興味を持ってくれて……本当に嬉しい限りです！

「ねえ麻弥ちゃん、今度の日曜日、俺外出許可貰ったんだ。だからさ、」

次の彼の言葉にジブンは耳を疑いました。それは何故かというところ……

「今度2人で楽器店行こうよ！麻弥ちゃんの好きなドラム、俺も見てみたいんだ！」

こう言われたからです。

「ええっ!?ジ……ジブンとですか？」

「……もしかして……都合悪かった？」

「いえいえ！全然大丈夫ですけど……ジブンなんかでいいんですか

!？」

「なんかっというより……麻弥ちゃんだから行きたいんだよ俺は。」  
ジブんにデコピンをした彼は屈託の無い笑顔に向けてきました。  
「それじゃ日曜日楽しみにしてるよー！」

彼の笑顔は……ジブンには眩し過ぎました。

そしてジブンは……その笑顔に心を奪われていました。



遂に当日になりました。

いつもより服装や身だしなみを気をつけて支度をし、彼の病室に向かいました。ジブンが病室の扉を開けると既に彼はいつもの入院時の服から私服に着替えて車椅子に座っていました。

「あー来た来たー！」

ジブンに気付くと車椅子を動かしてこちらまでやって来ました。

「すみません。お待ちせしました！」

「ううん、全然大丈夫！」

そう言う風音くんはジブンの服装を見ました。いつもと対して変わらないとは思いますが……

「ねえ、何か麻弥ちゃん雰囲気違う？」

「えっ!?!そ……そんなことは無いですよ！」

「うーん……まあいつか。ほら、早く行こ？」

「あ、待ってください！ジブン、車椅子押しますから！」

車椅子を動かしながら病室から出る風音くんを追ってジブンも後を追いました。

それからそう遠くないところにあるジブン行きつけの楽器店『江戸川楽器店』に到着しました。中に入るとギターを始め、ベースやドラムといった沢山の機材がそこらじゅうに……はあ……なんかテンション上がって来ました。

「ねえねえ……このギター凄いやー！あ、でもかなり高い……。」

風音くんも凄く楽しそうで安心しました。というか気づかないう

ちに結構移動してますね……。車椅子の使い方になれてるんですかね……?

それからはギター、ベース、キーボードなどの楽器を興味深そうに見てました。ジブンの解説にも凄く興味を持って……ジブンの凄く楽しくなってきました。

「それじゃドラム見に行こー!」

そういつて車椅子を動かしてドラム売り場までやって来ました。

そこには色々な種類のドラムがあつて、ステージでよく使うドラムや電子ドラムなど、一言で語るには足りない程の多さでした。

「ねーねー、ドラムって難しいの?」

「そうですね……。慣れるまで時間がかかると思います。でも上達してると実感が出てくると凄く楽しくなるんですよ!」

「へえ……。そうだ!麻弥ちゃんちよつと弾いてみてよ!」

「えっ!?!ジブンがですか!?!」

突然の風音くんの提案にジブンはビックリしました。ワタワタしている間に風音くんは店員さん試し弾きの許可をとっていたそうで……ホントこういうところは日菜さんっぱいですよね……。

「麻弥ちゃん、試し弾き大丈夫だつて!」

時すでに遅し……というべきでしょうか……。ジブンは苦笑いしながら用意されたドラムの椅子に座りドラムスティックを構えました。

演奏するのはパスパレの曲である『SURVIVER ねばーぎぶあつぷ!』です。ドラムを叩き、ジブンは演奏を始めました。

それから何分たったでしょうか。気づかないうちに演奏にのめり込んでいたみたいですが……。ジブンは不安になり風音を横目で見ると彼は目を輝かせながらこちらを見ていました。

「凄い……凄いよ!なんか詳しくは言えないけど……とにかく凄かったよ!」

「ちよ……ちよつと風音くん!」

車椅子から倒れそうな勢いで彼は前のめりになって話しかけて来た為なんとか彼が転ばないように必死で支えました。

「流石プロは違うね。もしかして芸能界の中でも結構上位で上手いんじゃない?」

「それは言い過ぎですよ…。ジブンなんてまだまだですし…。」

「うーん…：…そうだ!」

何かを閃いたように風音くんは手を叩きました。

「決めた!俺もドラムやる!」

風音くんの突拍子も無い言葉にビックリしましたが驚くのはまだここからです。

「今はまだ無理だけどき、もしその時が来たら俺に麻弥ちゃんがドラム教えてよ!」

「ええっ!?!ジブンがですか!?!」

「逆に麻弥ちゃんじゃないとヤダ!」

彼はそこまで断言しました。正直ビックリしましたが、『ジブンで大丈夫のかな』と不安にもなりました。でも…：…それ以上に…：…なんだか嬉しくなりました。

「わかりました。じゃあその時は手取り足取り教えてあげますね!」

「うん!」

屈託の無い笑顔でそう言った彼は思いっきり背伸びをして「俺も頑張らないとなー!」と呟きました。

その後、色々な機材を見て楽しんだジブン達は時間も忘れて二人で盛り上がってました。

楽しいときはあつという間…：…と言いますがまさにその通りですね。

…：…神様は少し意地悪ですよ。ジブンはまだまだ彼と楽しい時間を過ごしたかったのに…：…。

病院に戻ったジブン達は風音くんがベッドに戻ると、ジブンもそこでお別れを言って帰ろうとしてました。その時、彼から「待って」と呼び止められて、彼の元に向かいました。すると彼は1本のドラムスティックをジブンに差し出しました。

「今日付き合ってくれたお礼。実はこっそり買ってんだ。これ。」

彼の手元を見るともう1本のドラムスティックが握られてました。

「あ、このスティックはただのスティックじゃないんだ。ここ見てよ。」

風音くんが指差したところを見るとそこには『MAYAYA MATE』と刻まれていました。そして彼のスティックには『KAZANE SUZUNAMI』とお互いの名前が刻まれてました。

「風音くん…これって…」

「いいでしょ？いつかこれ使ってドラム演奏しようと思っててさ。だから…その時までそれ預かってよ。」

ジブンはそれを聞いてなんだか嬉しくなりました。このスティックは2つで1つ、彼がドラムを弾く時にはジブンのものも必要になる。その時まで…これはジブンが大切にしておかないとですね。

「わかりました！ジブンが責任もって預かりますね！」

ジブンはその日は彼からスティックを預かり、彼とお別れしました。その時の彼は子供ののように笑顔で手を振ってました。



○月□日

ジブンは何時ものように彼に会いに行きました。気づけばこれが習慣化してますね…。千聖さんにも言われましたけどなんだか最近のジブンは凄く生き生きしてるみたいで…ジブンでも理由はなんとなくわかるんですが…いざ自覚すると恥ずかしくなりますね…フへへ。

彼の病室の前に来たジブンは部屋に入る前に再び深呼吸しました。…なんかここ最近は会うだけでも緊張しますから…。今日も沢山機材やパスパレの話が出来れば言いなと思ひ、病室の扉を開けました。

「風音くん。今日も来ました…よ…。」

カーテンを開けたそこには…何時も笑って出迎えてくれた風音くんの姿はありませんでした。どこか出掛けたのかな？と思ひそこで待とうとしたその時…

「あの…涼南風音さんのご友人でしょうか？」



1人の看護師さんに声をかけられました。

「はい。彼は今…お出かけ中でしたか？」

「…えっと…関係者の方から聞いてませんか？」

「何をですか？」

深刻そうな顔をしながら看護師さんは口を開きました。

「……………え？」

その言葉にジブンの世界は…ジブンの時は…完全に止まりました。嘘ですよ？何かの冗談ですよ？

風音くんが…死んだなんて…。



それからと言うものの、ジブンは毎日がこれまでと違い虚無のように感じて過ごしてました。

頭の中が空っぽになって…何も考えられなくなって…目に写るものすべてがモノクロな何かにしか感じられませんでした。そのせいか、パスパレのレッスンにも集中しきれずミスを連発したり、スケジュールを間違えたりと…色々な人にご迷惑をおかけしました。それを見かねてか千聖さんはしばらくパスパレとしてのレッスンは休止するように言いました。彩さんやイヴさんは特に心配してくださいました…。

「……………また来てしまいました。」

ジブンは今、彼の病室の前にはいます。そこに彼はいないって、ここに来てもしジブンの求める風音くんはいないってわかっているのに…多分…その事を認めたく無いんです。

ジブンの初恋の人の死を受け入れられないから…。

病室には真っ白なシーツがかけられたベッドがポツンとありまし

た。一瞬、風音くんが笑っている姿が見え、慌てて駆け寄りましたが……結局そこには何も残ってませんでした…。

「嘘ですよね…。風音くんはイジワルだから…何かドツキリでも仕掛けてるんですよね…？」

白いシーツを握り、静かに呟きました。ジブンの目からは涙が流れ、手を伝ってシーツに染みを作っていました。

「嫌ですよ…。ここでお別れなんて！ジブンの約束はどうなるんですか！時が来たらドラムを教えるって約束はどうなるんですか！ちゃんとこのスティックを大切に持つてるんですよ！約束破るなんてあんまりですよ！」

周りに他の患者さんがいなかったのが幸いなのかジブンは感情に任せて泣きじやくりました。まるで悪いことをして怒られた子供のようにとにかく泣いてました。いえ、今のジブンには…これしか出来なかったんです…。

何分…いえ何十分泣いたでしょうか。気がつけばシーツに大きな水溜まりをつくっていました。

病室の天井を見てふと思ってしまいました。もう…疲れた…と。このまま何もかも忘れてしまいたい…。そしたらもしかして彼とも会えますかね…？でもそうだったら…やっぱり彩さん達が今度はジブンのような思いをするんですよ…。

本当に思考が回らずにこんなことまで考えていました。すると、開きましたの扉が開き、シャツとカーテンが開かれました。

「すみません！シーツを汚してしまつて…「あの…あなたは？」」

顔をあげるとそこには1人の女性がいました。服装からして看護師の方では無いようです。

「すみません…ジブンは大和麻弥と言いました…」

「大和…成る程。あなたが…」

何かを納得したかのように女性はジブンの元にやって来ました。

「あ、ごめんなさい。私は風音の母親なんです。」

「えっ？風音くんの…？」

「そうです。ねえ…ちよつとお話しない？」



ジブンは病室から離れて今は病院の中庭にいます。

「はい、コーヒーどうぞ。」

「あ、すみません。」

ジブンは風音くんのお母さん…玲奈さんからコーヒーを渡されま  
した。

「あ…何でジブンのことを？」

「あ、それはあの子から色々聞いてたのよ。」

お母さんの話を聞く限り風音くんは玲奈さんに色々ジブンの話  
をしていたそうです。

「そうですね。とても楽しそうに話してましたよ。母親である私相手  
より楽しく楽しそうで嫉妬しちやいそうでしたよ。」

笑いながらそう話す玲奈さんにジブンは苦笑いしました…。

「そうそう。これあの子の持ち物にあつたんです。」

そう言つて玲奈さんは一通の手紙と彼の名前が刻まれたドラムス  
ティックを渡して来ました。

「あの子からです。『麻弥ちゃんへ』つて書いてるから…あなた宛で  
す。」

「…開けてもいいですか？」

玲奈さんから許可をもらい、ジブンは封筒を開けて中の手紙を取り  
出しました。

『麻弥ちゃんへ』

この手紙を読んでいるということとはきつと俺はこの世にいないの  
かな？……なーんて。

でもこうなるのはわかってたんだよ。ずっと黙つててごめん。実  
は俺、不治の病つて言われてる程酷い病気だったんだ。だからもしか  
したら…つて思つてただけだよ。ぱりそうなる運命みたいなんだ。

でも悪いことばかりじゃなかったよ。もう治らないつて言われて

空っぽの状態の時：君に出会えたんだ。始めは退屈しのぎの感覚で話しかけたけど：気づいたらそれが生き甲斐みたいになっちゃった。だって麻弥ちゃん面白いし、楽器の話してると凄く楽しそうなんかもん。

それから俺は治らないとわかっていても「生きたい」って思うようになった。だって生きてないと麻弥ちゃんに会えないからね。

でも：それももう叶わないかも知れないんだ。だから：最後に2つだけ言わせて。

俺が使う筈だったスティック：良かったら麻弥が使つてよ。それ結構高くていいやつだったから：持ち腐れは勿体ないでしょ？それに：ドラムスティックは2本で1つだからさ、お互いの名前が1本ずつ刻まれてて：ずっと側にいられるかな？なんて。

それと最後にもう1つ。

ありがとう、大好きです。

こんな告白でごめんね。

#### 涼南風音』

手紙を読み終えたジブンは：それまで溜め込んでいた何か切れたいように再び涙を流してました。

「ねえ：私も読んでも良いですか？」

「……はい……」

玲奈さんも手紙を読みました。するとジブンを抱き締めてこう言いました。

「あの子も馬鹿ですね……。母親への手紙の方が文章少ないってどういうことですか……」

玲奈さんはそう言いましたが、少なくとも怒っている様子ではありませんでした。そしてジブんにこう言いました。

「麻弥ちゃん：ありがとう。本当にありがとう。」

ジブンは再び泣きました。子供のように入目も気にせず……。

それからしばらくして、ジブンの気持ちも収まりジブンは玲奈さん

も目を真っ赤にしています。

「本当にごめんなさいね。最後まで失礼な息子で…。」

「いえ、ジブンは風音くんに感謝していますから…。」

「それでなんだけど…もし良かったら…これ貰ってくれませんか？」

そう言つて玲奈さんはドラムスティックを渡して来ました。スティックには彼の名前が刻まれてました。

「……わかりました。大切にさせてもらいます！」



「ううう緊張してきた〜！」

「もう…そろそろ慣れてもらわないと困るわよ彩ちゃん。」

今日はパスパレのライブの日、彩さん達が会話をしている中、ジブンは二本のスティックをじっと見つめてました。

「麻弥ちゃん、そろそろ出番よ。」

「はい！すぐに行きます！」

千聖さんに呼ばれて立ち上がったその時…

『麻弥ちゃん、がんばれ！』

風音くんの声が聞こえた気がしました。そしてジブンは再びスティックを見つめました。『大和麻弥』、そして『涼南風音』。ドラムスティックは2本で1つ。この二本に刻まれた名前はきつと…どれだけ離れててもジブンの傍には風音くんがいる。そういうことなんだとジブンは思っています。

だからジブンは今日もドラムを叩きます。

天国にいる…風音初恋の人くんにも届くように。

## お弁当は誰のため（氷川紗夜）

「今日は私が夕食を作ります。」

「うんちよつと待って?」

突然家に押し掛けてきたお隣さんこと氷川紗夜。彼女の両手には人参、じゃがいも、玉ねぎなどの食材が詰められた買い物バックがあった。

「ですので、今日の夕食は私が作りますので風音さんはゆっくりしててください。」

「いや展開が急すぎて理解が追い付かないので説明を求めます。」

「日菜から聞きましたよ?あなたここ最近3食これで済ませてるみたいですね?」

と、紗夜はバックから1袋8本入りのスティックパンを取り出した。スティックパンとは一人暮らしである俺の主食。両親は大手企業の社員で日々あちらこちらを転々としてるためなかなか帰ってくるのは難しく、自分の食事は自分で何とかしている。そんな生活でスティックパンは素晴らしい食べ物だと俺は思う。何故なら一袋大体120円ほどで8本も入っている。なので4本ずつ食べたとしても1日にかかる食費は240円ほど。そして腹もそこそこ満たされる。

凄いでしょ?最高でしょ?天つ才でしょ?」

「そんな記憶喪失の自意識過剰でナルシストな自称天才物理学者みたいなこといつてますけどあなたは大きな見落としをしてますよ?」

「……それは?」

「こればかり食べてると栄養が偏ります。何より、男子高校生の必要な摂取カロリーが全然とれてません。このままだとあなたは栄養失調になりますよ?」

「うーん……一応たまーにコンビニのサラダ食べてるから大丈夫じゃないかな?」

「そういう問題じゃありません!」

紗夜は机を思いっきり叩き、鬼のような形相をこちらに向けてき

た。……これは逆らったらダメなパターンですよん…。

「いいですか!?そもそも貴方は自分のことになるといい加減過ぎます!食事を適当にしたり、睡眠をとらずに日菜といつも天体観測して……そんな羨……いえ、とにかく!貴方はもう少し体を労ってください!」

「えっ?今一瞬羨ま…」

「……………」

「あーハイ何でもナイデス。」

表情を更に強ばらせて来た為、俺は発言を控えることにした。表現の自由はどこへやら…。

「とにかく、今日は私がご飯を作りますので貴方にはそれを食べてもらいます。拒否権はありません。」

「…ウス。」

という訳で…俺は紗夜の料理を…馳走になることになった…。



「風音さん、ご飯出来ましたよ。」

「はい…。」

俺がソファアで寛いでいると紗夜に呼ばれた。紗夜の後を追い食卓に向かうとそこには綺麗に盛り付けられた2つのカレーライスがあった。

「カレー…ですか?」

「ええ。本当はもつとちゃんとしたものを作ってたのですが…時間か押してましたので…。」

「えっと…いただきます。」

スプーンを手に取り、カレーを掬い口に運ぶ。じつくりとそのカレーを噛み締めながら味わった。

「……凄く美味しい。」

思わずそう言ってしまった。程よく具材が溶け込みドロツとしたルウ、そして食べやすい大きさに切り分けられた野菜、肉は食べ応え

があり素材の味がルウに負けていない。まるで全てが計算されているかのようなこのカレー、1度食べたらまた食べたくなるような……そんな感じだった。

「おかわり。」

「食べるの早いですね……。」

「ん？ま……まあ……。」

「それはそうと風音さん、食事はしつかり噛んでから飲み込んでくださいね？」

「紗夜は俺のお母さんか何かなの？」

「貴方が子供すぎるだけです！」

そう愚痴を言いながらも紗夜はカレー皿を受け取り二杯目のカレーをよそっていた。

その後ろ姿を見ると本当に紗夜はお母さんになったら厳しいけど良い母親になりそうだよなと考えていると感づかれたのかジト目を向けられてきました。

それから2杯分のおかわりを食べ、お腹も膨れたところで食事は終わりになった。

カレー鍋を見ると本人曰く4人前はあったカレーが無くなっていらしい。片付けを済ませた紗夜はソファに座って一息着いていたので俺は彼女の為に冷蔵庫から冷えた麦茶を取り出してグラスに注ぎ紗夜に手渡した。

「お疲れ様。」

「ありがとうございます。」

麦茶を受け取った紗夜はそのまま飲み干し、グラスの中のお茶はすっかり無くなっていった。

「カレー美味しかったよ？」

「そうですね。それなら良かったです。」

「もういっそのこと紗夜が夕食作ってくれば良いのにな。なんて。」

からかうようにそう言うと紗夜は少し顔を赤くして固まっていた。



「え…今のは…」

「あ、うん。ごめん。気にしなくても大丈夫だよ？」

とりあえず彼女を落ち着かせるために何とか弁解を試みた。しかし…

「い…：…良いでしょう。お望みなら毎日つくってあげますよ？」

「へ？」

思わぬ紗夜の発言に俺は困惑してしまった。

「勘違いしないでくださいね!?ただ今日のことや今までの話を聞いている限りこのまま貴方を野放しにしていると栄養失調になりそうだからですからねっ!」

「いや…だから無理しなくても…。」

「いいえ!貴方は信用できません!」

「ええ…。」

どうにもこちらの話を聞いてくれない紗夜を片目に俺は頭を抱えたいた。

「それと明日からお弁当も作りますので覚悟しててくださいね。」

「なぬ!？」

「当たり前です!毎日スティックパンだけとか栄養バランスが偏ります!」

ここで俺は全てを悟った。こうなった紗夜は止められないと…。

「とにかく…：栄養失調になられては私も困りますので…：明日からはちゃんと食べてもらいますよ?」

「…：…本当お母さんだよね紗夜って。」

こうして、俺は紗夜から手作り弁当をつくってもらう生活が始まった。

しかし、弁当自体はとても美味しく毎日違うものを栄養バランスよく詰められてる為飽きることはなかった。というかスティックパン食わなくても全然平気になった。後たまにだけど紗夜が俺の好きなものを入れてくれたり、気分的に食べたいものとかも入れてくれた。紗夜ってエスパーか何か?

でもスティックパン生活の時より断然体も軽くなった気がするし

……紗夜には感謝しかない。今度俺も手料理振る舞ってあげようかな……。

あ、俺料理出来なかったわ。



氷川家にて…

「今日もちゃんと食べてくれますね。」

何時ものように彼から返却されたお弁当箱を開けると、中身は空っぽの状態に戻ってきていた。普段は意識してなかったですけど実際にこうして作ると母の気持ちになんともわかりません。

お弁当箱を洗おうとしたとき、弁当袋から紙のようなものが見えました。袋からそれを取り出すと、その紙にはただ一言だけ書かれています。

『何時も美味しい弁当ありがとう』

それを見たとき、なんだか凄く嬉しくなりました。普段は中々素直になれずに厳しい態度ばかりとってしまいますが、こんな私にも彼は感謝の意を向けてくれている。それだけで私の心は満たされたような気分になりました。

「今度、おかずのリクエストでも聞いておこうかしら。」

そう思い洗ったお弁当箱を拭き、戸棚にしまいました。

明日はどんなお弁当をつくってあげましょうか。

君を支えたい（松原花音）

生きているとどうしてもストレスというのは溜まってしまいうものだ。

現に俺もストレスが物凄く溜まっている状態である。今日もそういった出来事は起きた。大学の授業が終わったと思ったら緊急の補講説明会。しかもこれが無駄に長々とやるため疲労を疲労で上書きするような思いで放課後を過ごした。そしてそれが終わりようやく帰宅できると思いトボトボ帰宅していたらそんな俺を狙ったかのよくな突然の豪雨が降り注いできた。

当然俺は傘を持ってなく近くにコンビニもない……はつきり言つてアウトな状況だった。それ故に少し走っていたのだが、埒が明かない為近くのファーストフードショップに避難した。……全く、一体俺が何をしたというのだから。

とりあえず気分替えに何か食べていこうと思いい１００円のハンバーガーを１つ購入するため並んでいた。雨のせいか人も少なく俺の後ろには誰もならんでいなかった。

「次の方どうぞ……って風音くん？」

自分の名前を呼ばれスマホから顔をあげる。するとそこには水色の髪をサイドテールにしてる大人しそうな女の子がいた。

「あ、花音か……。久しぶり。」

「うん……それよりびしょ濡れだけど大丈夫？」

「いや、全然大丈夫じゃない。」

説明が遅くなったがこちらの少女は松原花音と言って俺の幼なじみだ。彼女は花咲川女子学園を卒業した後、女子大に進学しその傍らで高校時代から続けているこのアルバイトを頑張っている。

「もしかして……傘忘れた……とか？」

「忘れたと言うより突然雨降ってきたからそもそも持ってきてないんだよなあ……。あ、ハンバーガー１つ。」

「えっ？じゃあどうやって帰るの？」

「走って帰る。」

「だ…駄目だよ。また濡れちゃうよ…?」

「でも他に方法無いんだよな…。」

「…あのさ、少し待ってて貰えるかな?」

何か思い付いたかのように花音は言ってきた。因みにこのやり取りの間に注文と会計はすべて済ませた。



「お待ちせ。」

俺が席に座ってスマホを弄っているとバイトから上がった花音が来た。

「で、どうしたの?急に。」

「風音くんは傘持ってないんだよね?」

「そうだな。」

「じゃあさ…私の傘に入って帰らない?」

彼女の提案とはまさかの相合傘のことであった。

「花音の傘は?」

「ここにあるよ?」

「でも俺入ったら逆に花音が濡れないか?」

「大丈夫だよ。私にとっては…風音くんが風邪ひいちゃう方が嫌だから…。」

ここまで言われると流石に彼女の好意を無下には出来ない。そう思いしぶしぶ彼女の要求を呑み共に1つの傘で帰ることになった。

花音のお陰で打ち付ける雨から身を守る術は得たわけだがこの状況は少し気まずいのかも知れない。現に花音は先程から殆ど喋っていないのだ。…何か話すことは…。

「ねえ、最近どう?」

この雰囲気はどうにかしようとしたのか花音は俺に聞いてきた。

最近かあ…特にいいこと無いんだよなあ…。大学では先生の授業による負担や無茶なレポートとかでストレスしか溜まらないし、ゲー

ムやっつてもなんかうまくいかないし、この間なんか見たい映画観に行こうとしたら夜上映枠しか無かったんだぞ？マジでふざげんな。

「えつと…まあなんともないかな？」

「……本当に？」

「………ホントホント」

「………嘘つき。」

「え？」

花音の思いがけない一言に俺は思わず声を出した。

「風音くん…嘘つくとき片言になる癖があること知ってる？」

「……マジで？」

「うん。」

なんてこった。まさかあの花音がそこまで見抜いているとは想定外だ。

「ねえ、今日…風音くんのお家に泊まってもいい？」

「えっ？いいけど…どうしたの突然。」

「ううん…風音くんにご飯食べて貰いたくて。私、料理上手くなつたんだよ？」

「……じゃあ…お願いしようかな。」

「うん！」

そんな話をしながら俺たちは俺が暮らしている家に着いた。花音は一度戻り荷物を纏めてくると言っていて流石に雨のなか1人でいかせる訳にはいかないので俺も着いていった。こうして再び俺の家に戻った俺たちは夕飯を作っていた。

「……ごめんね？お手伝いしてもらっちゃって。」

「いや、まかせっぱなしは気が引けるからな。」

俺たちは分担して料理を作っていた。基本的には花音が作り、俺は補佐をするという形ではあったが。

そして料理が出来上がる。ご飯、味噌汁、肉じゃが、サラダといったバランスのいいメニューがテーブルに広がっていた。

「いただきます」と言って肉じゃがを口に運ぶ。お肉の柔らかさと甘口の味付けが口のなかに広がり凄く満たされたような気分になっ

た。

「……こんな美味しいの久しぶりに食べた。」

「そ……そうなの？」

「うん。……あのさ、お酒飲んでいい？」

「あれ？風音くん……お酒苦手だったんじゃない？？」

「チューハイとかなら飲める。」

そういつて俺は冷蔵庫からスト○ングゼロを取り出し、缶の口を開けて飲む。そしてその勢いで肉じゃがを食べる。うん、ビールじゃないけど凄く美味しく感じる。肉じゃがのお代わり欲しい。

そして暫くして俺たちは食事を終えて片付けをした後、2人でテレビを見ていた。しかし今日は特に面白い番組がやっている訳ではなかった。チャンネルを変えながら明日だったらパスパレが出る特番やってたのにねと話していたとき……

「……ねえ、もし私でも良かったらさ……風音くんの悩み……教えてくれないかな？」

「……花音？」

「こんな形でしか言えないけど……私も風音くんの助けになりたいんだ。……ダメ……かな？」

弱々しくも力強い彼女の声が俺に届いてくる。……なんだろう、少しフワツとしてきた。さっきのお酒が今になって回ってるのかな？

でもこの際どうなってもいいかもしれない。そう思った俺は……

「じゃあさ……言うよ？」

少しずつ、気分を身を任せていった。



「でさ、この間もさ……先生が理不尽なことに俺の言い分全く聞いてくれなくてさ……レポートの考察全部書き直せって言い出したんだよ……。」

「……そっか。」

「確かに俺の書いてたことも曖昧だったかも知れないけどさ、あつて

るところまで書き直せは無いじゃん！それに大体先生だってテストで肝心な図を手抜きしてるんだから文句言わないでよ！ホントあゝ  
\*\*\*でな先生は!!」

先程から風音くんはこんな感じで普段から溜まっていたであろう不満を一気に溢しています。私は彼の気が済むまでその話を聞いていました。

「それにさ…バイトも帰ろうとしたら突然残業しろとか言い出すし、客も客でいちいち面倒なクレーム入れてくるし…俺が一体何をしたら言うのさ…」

「うんうん、風音くんは十分頑張ったよ…。辛かったんだね。」

それにしても普段はこんなな感情的にならないのに…。もしかしたらさっきのお酒が回ってるのかな？あのお酒…確か結構アルコール度数高かった気がするし…。

「もうさ…ホント辛くて辛くて…」

暫くすると彼は殆どの不満を吐ききったのかウトウトし始めた。もしかして眠くなったのかな？

「…か、風音くん…、眠いなら…布団引くよ?」

「……くら」

「えっ?」

「膝枕して…」

ふええ…!?ひ…膝枕!?あの風音くんから要求をしてくるなんて…。

「じゃ…じゃあ…、寝る?」

「…うん。」

私が正座をして膝を軽く叩くと風音くんはそのまま横になって私の膝に頭を置いて寝息を立てていた。頭だけけど…膝にかかる重みからやっぱり風音くんも男の子なんだなと感じた。

それにしても…凄くスッキリしたような顔をして私の膝で寝てる風音くんを見ると私も嬉しくなってきた。普段はあまり不満を表に出すような人じゃ無かったし、こうやって素直に甘えて来ることは無かったから私もなんだか嬉しい気分になっている。今私は彼の支えになってるんだなって感じる事が出来るから。

彼の頭をそつと撫でながら彼の表情を見る。触れる度にちよつと反応しちやうところがまた可愛いなと思った。

「……花音く。」

「何？」

「……結婚しよ。」

「ふえ？」

彼の突然の言葉に私は数秒間、時間が止まりました。

「ふええく!? け…結婚!？」

「……ダメ? 花音は嫌？」

「えっ? い…嫌じゃないけど…」

「…俺は花音のこと…大好きだからさ…。」

私は普段あまりお酒を飲まないからわからないけど…酔つちやうとこんなになつちやうものなの? さっきのお酒は風音くんが飲んでいたものを少し貰っただけだからそこまで飲んでないし…。

「……花音?」

半開きの目で私を見ながら私の名前を呼ぶ彼に思わずきゅんと来てしまった。アルコールの力が入つてるとはいえ彼は自分の思いを伝えてくれたし…私も…自分の思いを伝えようかな。

「いいよ?」

「…にゅ?」

「風音くんがそう言うなら…やる? 結婚。」

「…いーの?」

「うん、私も風音くんのこと、大好きだから。」

「……ありがとー…俺も………すう…」

そういつて彼は安心したのか再び寝てしまった。私は勢いに任せであんなこと言ってしまったけど後悔はしていない。だってお互いの気持ちを知ることが出来たし、もし酔いが覚めて彼がこの事を忘れていても…今度はアルコールの力じゃなくて…自分たちの力で思いを届けようと思う。

「すー…すー…すー…。」

「ふふつ、大好きだよ風音くん。」



彼の寝顔を見ながら私はずっと傍にいた。この時間は2人で過ごしてきた中でも……凄く幸せな時間だった。

暫くして彼は1度起きて、今度は布団で寝た。まだ酔いが覚めて無いか今度は1つの布団で一緒に寝ちやいました。

そして次の日、全てを思い出した彼は顔を真っ赤にしてソファアームに踞っていた。そんな彼を見て「可愛いなあ。」と思ったのはここだけの話。それとあの時の告白が無効にならなくてすんだのはとても嬉しかったです。

ご機嫌斜めの歌姫さん（湊友希那）

太陽目が覚めて雲ひとつ無い晴天が広がる空の下、いつも通りおうちでYouTubeで動画を見たり、ソファーに転がりながらポケオンをやる。それが俺の休日の過ごし方。

しかし今日はそういうわけにもいかないらしい。

「……………友希那さん？」

「何かしら。」

「そろそろ退けてくれませんかね？」

「嫌よ。」

今の状況を簡潔に説明しよう。

朝起きて、飯食って、何時ものようにSwitchを起動してゲームをしようとしていた時、突然玄関の呼び鈴が鳴った。

「はい。……………ってあれ？」

「……………」

そこには俺の友人であり、幼なじみでもある湊友希那がいた。

「どうした？こんな時間に来るなんて珍しいな。何か用か？」

「……………別に……………」

「そう？まあとりあえず上がって「そのつもりよ。」：お、おう？」

と、なにやら不機嫌なのかまともに目も会わずに容赦なくうちに入っていった。

それからと言うものの俺が友希那を見るとそっぽを向くくせに、俺がゲームをしているとずっとこちらを見てくる。そしてそんなやり取りが暫く続き、痺れを切らしたのか彼女は俺に膝枕を要求してきた。……………一体なんなんだ……………

「なあ、本当に何があったんだ？」

「……………フン。」

本当にわからない。なんだか不機嫌なのは伝わってくるが……………まさかりサと喧嘩したか？いや、こいつらに限ってそんなことは無いだろう。多少反りが合わないことはあったが喧嘩なんて滅多にしない

かったんだ。それとも Rose l i a でまたトラブル……は無いな。仮にそうだったとしたらこんな感じじゃなくてもつと深刻そうな表情をしているだろうし。

だとすると後考えられるのは……

「なあ友希那……俺お前に何かしたか？」

やっぱりこれしかない。しかし、ここ最近友希那との喧嘩の火種となるようなことは思い付かない。いや、まさか……

「もしかしてこの間のねこまん食べたこと……怒ってるのか？」

そう、俺が友希那のものとは知らずに食べてしまったねこまん。後からリサに言われてわかったのだがあれは友希那が買ってきて、その可愛さに食べることを戸惑い結局近くのテーブルに置いていた。それを何も知らない俺が食べてしまったと言うわけだ。そして謝るタイミングを逃し、そのままになっていた。

「いや、あの件は知らなかったとはいえ悪かったよ……。でもあの時完全に謝るタイミング逃しちゃってたし……」

必死に謝罪するが本人からの反応は無し。誠実さが足りないともいうのか？

「……一昨日」

「え？」

突然友希那が謎のワードを出してくる。一昨日？一昨日って確か

……

「リサと映画行ってたでしょ。」

「ああ……。なんか『観たい映画があるけど男女割で凄く安くなるから付き合って』って言われてな……」

「それでその後ショッピングモール行ってたでしょ。」

「……何で知ってるの？」

いや、怖いよ。どうしたのこの子。

「それでこの前の日曜はあこと隣子と一緒にだったじゃない。」

「それは……N F O の限定グッズの発売日で色々と一緒に見て回ろうって2人に誘われて……」

「……1週間前は紗夜と羽沢さんのお店にいたじゃない。」

「あれは紗夜に相談があつて……それのお礼にあそこの美味しいケーキを奢る約束してたから……」

いや本当にどうしたの?というか何で俺の行動そんなに知ってるの?もしかしてこの子ストーリーカーしてる?

「あのー友希那さん?何でそんなに詳しいんですかね?」

「……………くせに……」

「え?」

何か小声で呟いていた。よく聞こえなかったので彼女に聞き直したところ……

「私の誘いは全部断ったくせに。」

「……………え?」

「まさかもう忘れたの?」

友希那の言葉に俺は首を傾げた。そして考えること数分……

「あ。」

思い出した。一昨日、この前の日曜、そして1週間前、全て友希那に何か誘われていたのだがあいにく彼女たちと先に約束していたので断っていたのだ。

「私の誘いは蹴るのにリサたちの誘いは受け入れるのね。」

「……………もしかして……拗ねてる?」

そう言つたところ彼女の体が一瞬動いたように感じた。どうやら凶星らしい。

「……………友希那?」

「そんなわけ無いじゃない。大体どうして私が拗ねるようなことをする必要があるのかしら?あなたは私よりもリサたちと一緒にいたかった、ただそれだけのことよ。それなのに私が嫉妬する要素なんて何処にもないわ。だいたい……」

「あの……大分墓穴を掘つてるように聞こえるのは俺の気のせいかな?」

とりあえず友希那を落ち着かせ話を続ける。

「あのさ……とりあえず落ち着こ?」

「何を言ってるのかしら?私は常に冷静よ。それにあなたの事なんて

そこまで興味ないわよ。だいたいこれを知ってるのだったって偶々その現場を見ただけであって何もあなたの行動を探っていた訳じゃ」

「オツケーわかった。とりあえずわかったから一体止めよう。」

このままじゃ話が続かないと判断した俺は一端話を中断させた。なんとか落ち着いたのか暫くの間彼女は黙り込んだ。しかし、その時間が数分続いたことで今度は逆に気まずくなりなんとかこの状況を打開すべく色々話の種を探していたのだが、如何せんいい感じの話のネタが無く俺は内心焦っていた。

「……今度の日曜、猫カフェに連れていきなさい。」

「え？」

そんな中、口を開いたのは友希那だった。

「聞こえなかったかしら？今度隣の猫カフェに連れていきなさい。それでこれまで私の誘いを蹴った分は言わないであげるわ。」

「わかったよ。」

「……次他に予定を入れたら承知しないわよ。」

そつぽを向いたままそう言った。そんな彼女を見ながら俺は「素直に寂しかったって言えば良いのに。」と想いながらなんだか微笑ましくなった。

「あ、それともう一つ言い忘れていたわ。」

何かを思い出したように再び口を開いた友希那はそのまま言葉を続けた。

「私のネコまんを食べた犯人はあなただったのね。」

……確かに言いましたねそんなこと（ド忘れ）

「……ジツ」

「……わかったよ。今度新しいの買ってくるから……。」

「それで良いのよ。」

そう言うとき友希那はそのまま明後日の方を向いた。

「やれやれ……」と思いつつも目の前にある歌姫の頭を毛筋に沿うように優しく撫でた。一瞬ビクツと反応はしたものの、その後は何の反応も無かった。いや、気がつけば眠ってしまったのだ。

「全く……手間のかかる歌姫さんだなあ。」

でもそんなところが可愛いんだよなあ。

そう想いながら俺を背に眠っている友希那を見る。その表情を見ることは叶わないが何となく凄く心地よさそうな顔で眠っているのは容易に想像出来た。

因みに後日、ちゃんと猫カフェには行きましたし、ネコまんも買ってあげました。

おまけ

「友希那、これ。」

学校の屋上、友希那を呼び出した俺は包装紙に包まれた1つの箱を彼女に手渡す。それを受け取った友希那は「開けてもかしら？」と聞いてきたのでおれは黙って頷く。友希那が丁寧に包装紙を剥がし、箱を開けると…

「ネックレス…？」

真ん中に紫の小さな宝石が入ったネックレスがそこにあつた。頑張ってバイトして買いました。因みに声には出さないけどこれでバイト代2ヶ月分飛びましたねハイ。

そのネックレスを手に取ると、そのまま彼女は自分の首にネックレスを取り付けた。

「……似合ってるよ。」

「そうかしら？」

「……友希那、誕生日おめでとう。」

「ええ、ありがとう。」

その時の彼女の笑顔は、胸のネックレスの輝きよりも美しいものだった。

離れていても繋がる空（戸山香澄）

真つ暗な部屋の中で俺は一人、机に置かれた問題集と向き合っていた。

一段落ついたところでペンを置き、背筋を伸ばして一息つく。そのまま時計を見ると時刻は既に深夜1時を回っていた。

「少し休憩するか…。」

椅子の背もたれに体重をかけて机の引出しにしまっていたスマホを取り出す。電源をつけ、適当にネットサーフィンをしていると突然某緑の連絡アプリの着信音が響いた。

画面にはある人物の名前が映し出されていた。電話を賭けてきた人物は戸山香澄。俺の幼馴染みでしょっちゅう遊んでいた。今はお互い別々の高校に進んだ為、特に会うことも無くなっていたし、声を聞くことも無くなっていた。

まーバンドも始めたらしいし、しゃーないっちゃしゃーないんだけどなんか寂しかったりもするのはここだけの話。

とりあえず妙な雑念は置いてスマホの通話ボタンをスライドした。

「もしもし〜。」

『風音くうくん！良かったあ〜！』

耳元にスマホを当てた瞬間、大音量の音が響き渡った。

「おいおい…お前今何時だと思ってるんだよ…。」

『だってえ〜…だってえ〜…』

「……で、どうしたよこんな夜中に。」

話を聞く限り、どうやら今日の昼頃にポピパの皆でホラー映画を観たらしい。そしてその内容がとんでもなく怖かったんだとか。それで怖さのあまりに眠れなくて俺に電話をかけてきたらしい。

「だからってこんな時間に俺にかけてくんなよ…。」

『……ダメだった？』

「いや駄目とは言わないけどもし俺が寝てたらどうする。」

『うーん…かけ直す!』

「要するに何も考えてなかったと。」

若干呆れながらもとりあえず話を聞くことにした。

「で、何を話せばいいんだ?」

『えつと…:あ、そうだ!この間ポピパの皆とやったライブの話とか?』

「ライブ…?」

『先週C i R C L Eでやったライブだよー!風音くんにもチケット渡したでしょ?』

「あーハイハイ、アレね。」

そう言えばあったなと思いつつ机の引き出しを開け、その時ライブの半券を探しだした。

「にしてもよくあんな奇抜なことをしようと思ったな。」

『奇抜?』

「お前ライブ中に飛んでたろ。」

と言うのも、この戸山香澄は当時のライブで突然ジャンプしたかと思ったら空を飛んでいたのだ。多分後ろからワイヤーで吊るしていたのだと思うが、その時見ていた俺としては衝撃と心配で開いた口が塞がらない状況であった。

『でもお客さんも楽しんでくれてたよ?』

「それよりもこっちは衝撃の方が大きかったんだよ。大体何でライブ中に飛ぶなんて発想に至るんだよ。」

『うーん…やりたかったから?』

「それで採用されるお前のバンドどうなってんの?」

本気でこの疑問しかない。普通「空飛びたい!」と言ったとしても大体却下されるもんだろ。

『うーん…有咲には『駄目にきまつてんだろー!』って止められたんだけどね。多数決取ったらおたえとさーやがあげてくれて通っちゃった!』

「それで通るお前らのバンドの規格が計り知れないんだけど!」

『えへへ。』



「いや褒めて無いからな？」

「それでね」と話を続ける香澄はどこか楽しそうで正直羨ましいと思った。最近はあるていど電話越しでも彼女が凄く楽しそうなのが伝わってきて、嬉しいようでどこか寂しくも感じてしまう。

『……なんだけど』

……あれ？風音くん？もしもーし？』

「……ん？ああごめん。何の話だっけ？」

『えー!?聞いてなかったの!?!』

考え事をして香澄の話を聞いていなかった俺に対して「もー！」とわかりやすく怒っていた。

「そう言えばさ、香澄が意識始めたのってあの時だったよな。ほら…

あのお前と明日香ちゃんが迷子になったとき。」

『そうそう！あの時間こえたんだ〜星の鼓動が。』

「……改めて聞いてみるけどさ、どんなだった？」

『うーん、キラキラしてて…ドキドキしてた!』

「相変わらずの返答だな。」

ほくそ笑みながら話を続ける香澄の言葉に耳を傾けながら席を立ち、部屋の窓を開けた。

その時、目に飛び込んできた風景に思わず釘付けになった。

「香澄、空見てみる。」

『空？何があるの?』

「いいからいいから。」

俺が促すと電話の向こうから窓を開ける音が聞こえた。そして香澄の「ほわあ…」という声も同時に聞こえた。

『風音くん！星がいっぱい出てる!』

「だろ？お前にも見えたか。」

俺たちの目に映るのは、普段は曇り空や街の街灯などで見にくい数多の星々だった。おそらく今の季節が冬ということと空気が乾燥していること、そして現時刻は既に深夜1時を越えていたことから辺りの建物の光が消えていて光の影響が少なくなり星が見えやすくなったのではないだろうか。

『あの時みたい。』

「あの時……もしかして？」

『うん。あつちゃんと見たキラキラドキドキみたい。』

成る程。全く同じという訳ではないけどこういう感じだったのか。確かにこの感動は一言で語るには少し難しいな。その結論がキラキラドキドキなのかはまだ俺にはわからないけど。

『ねえ、風音くん。』

「ん？」

『なんか……不思議だよ。』

「何が？」

『あつちゃんと見たときはさ、同じ場所で一緒に同じ景色を見てた。でも今は風音くんとは離れた所にいるのに今同じ景色を一緒に見るんだよ。』

「そう言われりや確かに。」

突然の香澄の言葉を納得と関心を抱きながら聞いていた。

『それで思ったんだけどね。どれだけ離れていても……私たちはこの空の下で繋がっているんだなって思っちゃった。』

「そうか……。」

『そう考えるとき、なんか……キラキラドキドキするんだ。』

「…………ハハッ。」

香澄のその一言に俺は思わず笑いを溢してしまった。それを聞いた香澄は『ちよつとー！』と苦情を入れ始めた。

『なんで笑うのー!?!』

「あー、ごめんごめん。なんか香澄らしからぬ発言だなと思うと……つい、な？」

『それどういうことー!?!』

そんな騒々しいお相手との通話はそれから2時間以上に渡った。その間俺たちは冬の寒い季節であるにも関わらずずっと窓を開け、夜空を眺めていた。

しかし楽しい時間はあっという間というものなのか電話の向こうから香澄のあくび声のようなものが聞こえてきた。

「どうした？眠たくなつたか？」

『うーん：なんか風音くんと話していると安心しちゃって…』

「じゃあそろそろ寝ろよ。朝起きられなくなるぞ？」

『はーい。じゃあまたね。』

「おやすみ。」

『おやすみ。』

そうして俺はスマホの通話終了ボタンを押し、再び椅子の背もたれに寄りかかった。「騒がせやがって」とは思いながらもなんだか悪い気はしなかった。

(さて、次来たときはどんな話をしてやろうかな。)

そう考えながら俺は再びペンをもち問題集を解き始めた。

## 君の花言葉（美竹蘭）

「蘭。今日からうちでホームステイする事になった○○くんだ。」

ここから出会いが始まった。

彼は日本人とイギリス人の HALF で小さい頃は日本にいたのだが小学校の頃にフランスに家族で移住していた。

その為、日本語は多少は話せるがまだまだと言ったところだ。

「よ……よろ……しく?」

「……………」

オドオドしてパツとしない。それが蘭から見た彼への第1印象だ。

「蘭、お前は彼に華道について色々教えてあげなさい。」

「あ、あたしが!」

「うむ。お前も華道を学んでる身だ。学ぶだけではなく人に教えた方が知識も身につきやすくなるというものだからな。」

なんであたしが…と心の中で父親に悪態をつくも、断る訳にもいかず蘭はその役目を引き受けた。

「よ……よろしくお願いします…」

「……………」

本当に大丈夫なんだろうか。

その時の蘭の心情はただこれだけだった。



○○が来てから2ヶ月がたった。

日本語の学習については彼の飲み込みが早かった為か今では普通の日本人とも大差ないくらいにまで話すことが出来るようになっていた。

華道についてはだいぶ上達してきたのだがまだまだと言った感じだ。

「ラン、これでどうかな?」

「うん、悪くないね。でもこの花が少し萎れてる。」  
「えっ?」

「この花は萎れやすいからもっと注意した方がいい。」  
「はい。」

また失敗した…と落ち込む○○であったが、蘭はそのまま話を続けた。

「でも最初の頃よりはかなり上手くなってる。もっと自信を持っていよ。」

その一言で○○は驚きと喜びが混ざったような表情をした。  
「ホント?」

「うん。花を見てればわかる。」  
「……ありがとう」

蘭の言葉を聞いて○○は笑顔になった。その笑顔を表すのであれば、彼の心に花が咲いたような笑顔だった。

(なんか…可愛い。)

ふと蘭はそう思ってしまった。

男の子に対して可愛いなんて表現は変かもしれない。でもなんだか本当に自分の弟子が出来たような気分になり、蘭も知らないうちに笑っていた。

「まだやっていただけなのか。そろそろ休憩にきなさい。お茶も淹れたぞ。」  
「うん。そうするよ。」

父親に言われ、蘭は片付けを始めた。

「これは…○○くんが生けたのか?」  
「はい。」

「ほう…中々上手くなったじゃないか。」  
「ありがとうございます!ランのご指導のお陰です!」

「フツ…そうか。」

それから○○は「ランは凄いでス!」と色々な事を蘭の父親に話していた。それを聞いていた父は娘の成長を感じどこか誇らしげになっていた。一方の本人は「いつまでやるの…」と言いたそうにしながら顔を赤くしていた。



ある日の事だった。

蘭は○○を連れてショッピングモールに来ていた。華道で必要なものを買いに来たついでに○○にショッピングモール内や付近のお店や施設の案内をしていた。

「ランさん！お久しぶりです！」

そこにやって来たのはイヴだった。

「久しぶり。買い物？」

「ハイ！骨董品を見に来ました！」

「相変わらずだね…。」

明るく返答をするイヴに対して蘭は苦笑いしていた。

「ラン、この人は？」

「イヴだ。「若宮イヴです！」ちよつと?!」

紹介しようとしたところイヴが食い気味に話に割り込んでいた。

「あなたはもしかして国外から来たのデスか？」

「はい！フィンランドからです！」

「フィンランドデスか！ボクはイギリスから来ました！」

「イギリスですか！素敵なところですね！」

と、自分を差し置いて弾む会話を見ていて蘭はなんだかモヤモヤしていた。

「○○、早く行かないと全部見て回れないよ。」

「うん。じゃイヴ、また今度！」

そのままイヴと別れ、○○は早足で進む蘭に必死でついて行った。一方の蘭は何故かモヤモヤしてしまい一刻も早くここから立ち去りたいと思っていた。

「ラン、どうしたの？体調悪いの？」

「…そんなのじゃない。」

そうは言っているがあからさまに不機嫌であるのが見て取れた。

○○は辺りをキョロキョロと見ていた。そして…

「ラン、ちょっと待ってて貰っていい?」

「えっ? あっ…ちょっと!」

○○が駆け足でどこかに行ってしまう、蘭はその場に置いてけぼりにされてしまった。近くのベンチに腰をかけながら深いため息をつく。蘭は自分の気持ちについて考えていた。

「はあ…なんなんだろう…」

自分でも分かるくらいに変な感じだった。なんだかいつもの自分が制御出来ない、そんな気分だった。いったいこの現象はなんなのだろうか。今の蘭には検討もつかず、ただため息を着くことしか出来なかった。

「ランーお待たせ!」

○○が駆け足で戻ってきた。

「…どこ行ってたの?」

「これが目に入ったから…買いに行ってたんだ。」

○○が蘭に見せたのはブーケンベリアという南国の花のような髪飾りだった。

「ランにあげようと思って」

「あたし…に?」

「ちよつと動かないで…」

そのまま○○は蘭にその髪飾りをつけた。

「うん、似合ってるよ。」

「えっ…?」

「ねえラン、ブーケンベリアの花言葉って知ってる?」

「花言葉…?」

「ブーケンベリアの花言葉は『情熱』『あなたは魅力に満ちている』なんだ。なんかランみたいだよね。」

そう言われ思わず蘭はドキツとしてしまった。なんだか何時もより○○を意識してしまう。この気持ちはなんなんだろうか。

そう言えばひまりからそんな現象に関しての話を聞いたことがある気がする。確か…

「ラン?大丈夫?」

「だっ…大丈夫だから！ほら行くよ！」  
これまで以上に顔を赤くし、蘭は先を急いだ。○○も再び彼女の後をついて行った。

この後日、蘭がこの感情について理解することになる。  
しかし、それは決して幸せの始まりという訳では無かった…。



「……………」

蘭は物凄く不機嫌な表情をしていた。この日、○○は羽沢珈琲店にアルバイトに出かけていた。

どうやら若宮イヴから誘いを受けたらしい。○○が「バイトをした」と言い出した時、蘭は「華道の練習はどうなの？」と問いただしていたが、それを振り切り始めたのだという。因みに○○曰く、「蘭の父からは許可をとっているから問題無い」らしい。  
「ただいま。」

○○が帰ってきた。はやる気持ちを抑えながら玄関に向かい彼を出迎えた。

「遅かったね。」

「ごめん…。」

「バイト、2時までだったよね？もう4時だけど？」

「ちよつとイヴと色々お話してたんだ。フィンランドのお話とかバンドのお話とか色々聞いてて…。あ、今度剣道にも誘われたんだよ。」  
「…:…またイヴ？」

イヴの名を○○の口から聞き、蘭はより目付きが鋭くなった。

「なんでイヴとばかりいるの？なんで？」

「なんでって…楽しいから…」

「じゃああたしとは？華道は？」

「た…楽しいよ。」

「じゃあなんで!?!」



納得がいけないと言わんがばかりに声を上げた。

「なんであたしとは一緒にいてくれないの？なんでイヴとばかりいるの？最近気がつけばイヴとばかりいるじゃん！それなのに最近はおたしとはほとんど話してくれないじゃん！あたしじゃ駄目なの!？」

「そんなことない！でもイヴとも「イヴの名前は出さないで！」

無理やり言葉を遮り怒りを顕にした。その時の蘭は興奮した猛犬のようにフウフウと息切れしていて傍から見れば普通の状態じゃないというのは一目瞭然だった。

「大体○○は華道の勉強に来たんでしょ!?!じゃあ華道やるべきなんじゃないの!?!……あたしがちゃんと教えてあげるから……。」

先程よりも息切れは激しくなっているが少しずつ冷静になつてるようにも見えた。

しかし…

「なんで？」

「えっ？」

「なんでランにそこまで決められなきゃいけないの？」

ついに○○が蘭に牙を向いた。

「ボクが誰と一緒にいるかなんてボクの勝手でしょ!?!確かにボクは華道の勉強に日本に来た！でも華道だけやってても仕方ないよ！ボクは日本の色んな文化を知りたいんだよ！イヴはそんなボクに色々教えてくれる！ボクはそれが楽しいんだよ！」

「……で、でもあたしだって色々……」

「じゃあランは何を教えてください？」

確かに華道の他に日本語や色んな場所を教えてくださいましたよ。でも最近はお口を開けば華道華道って、それだけじゃん！」

目から涙をこぼしそうになる蘭に気付いていない○○はそのまま

…

「ボクはイヴという方が楽しいんだよ!!!」

それにツグミだってボクを大切にしてくれる!!!

今のランというよりもずっとマシだよ!!!」

トドメの言葉を放った。

その日、蘭は部屋に引きこもり、○○と会話をすることは無かった。



どうして？

どうしてこうなったの？

あたしが悪かったの？

でもあそこまで否定しなくてもいいじゃん。

あたしはただ○○と一緒にいたかっただけなのに。

それなのに…

しばらく考えた。そしてわかった。

そうか…

○○は悪くない。

本当に悪いのは…

○○をこんなことになるまで放置してしたあたしなんだ。



次の日、○○は蘭の部屋の前で彼女を呼んでいた。

「ラン、昨日はキツイこと言つてゴメン。もう一度話してくれないかな?」

「○○がそう言うのとゆつくりと扉が開き、部屋から蘭が出てきた。しかし、その時の蘭は髪はボサボサで目の下にクマまで出来てきた。」

「ラン!?大丈夫…:えっ?」

その瞬間、○○は蘭に部屋の中へと引きずり込まれてしまった。

蘭は部屋に○○を連れ込むと中から鍵をかけた。

「ラン…:どういうこと?」

「ごめんね。」

「えっ?」

「あたしがちゃんと…」

「ちゃんと導いてあげることが出来なくて。」

その時の蘭の瞳には光が灯っていなかった。まるで正気を失い、悪魔にでも取り憑かれたかのようにそう呟いていた。

「でも大丈夫。もう同じ過ちは繰り返さないから…」

「ラン?何言つて…」

「生徒が間違えた事を覚えたら、正してあげるのが教育者だったよね。だから…」

「今からあたしが…:ちゃんと教えてあげるから…」

この時、○○は死を覚悟した。



「ラン、今日はこのくらまでこの…」

「うん。じゃあちよつと休憩に散歩しに行こうか。」  
「うん！」

それから○○はいつもと変わらず蘭と仲良く過ごしていた。  
毎日のように華道をしたり、散歩をして色んなものを見たりと楽しい日々を送っていた：

「あつ！○○さん！お久しぶりです！体調が悪いつて聞いていたのですが大丈夫なんですか？」

そこに通りかかったイヴが近寄ってきた。しかし、蘭はいつもと変わらない余裕で構えていた。

そして○○は：

「○○さん？」

「あつ …… あつ …… う わ

ああああああああああああああああああああああああああああああ  
!!!」

突然断末魔のような大声を上げその場に蹲ってしまった。

「○○さん!?どうしたのですか!?も…もしかして病気なんですか!？」

「○○、しつかりして。」

「フウー…！フウー…！」

「○○さん…」

「大丈夫だよ。あたしにまかせて。」

「で…ですが!」

「いいから。ちゃんと対処法はわかってる。」

そう言つて蘭は○○を連れてその場から立ち去つた。

「大丈夫だよ。もうすぐ家に着くからね。」

そう言つて蘭は○○を支え続けた。

(良かった。ちゃんと洗脳<sup>教育</sup>出来たみたいだね。)

以前、○○は蘭にブーケンベリアの花飾りをプレゼントしながらこう言った。「ブーケンベリアの花言葉は『情熱』『あなたは魅力に満ちている』なんだ。なんかランみたいだよね。」と。

実はブーケンベリアには『情熱』『あなたは魅力に満ちている』の他にもう1つ花言葉がある。

もう1つの花言葉。それは…

『貴方しか見えない』

その言葉通り、今の蘭には○○しか見えていなかった。

## 風邪引きはなんとやら（二葉つくし）

風邪を引きました。

俺は今ベッドの上で横になり、その風邪と葛藤している。正直やること無くてマジで暇です。暇すぎてひまりちゃんになりそう（謎）。

学校に電話を入れて、今日は大人しくしようかと思っただけどあまりにも暇だったので少しだけゲーム（FPS）をやっていた。この時の心情としては「ゲームやつてりや風邪も治るでしょ」って感じ。なんか昔の偉い人もそんなことを言ってた気がするし。

しかし、そこで問題が発生した。

ゲームをしていたのだが、風邪を引いているせいか画面酔いをしてしまい思いつきりゲボったのだ。どうやら逆効果だったらしい（当たり前前）。

そんなこんなで今は大人しく横になっている。しかしやはり暇だ。正直睡眠はしっかり取ったからもうエナジードリンクが無くてもオール出来そうな気がしてきた。

グウウウ…

そう考えていると腹の虫が泣いた。そういや朝から食欲なくて朝から何も食べてなかったなあ…。とりあえず何か口にしておくか。風邪は膳のしたとか言う言葉もあるし。

風邪といたらお粥やうどんといった消化にいいものや食べやすいものがオススメされるだろう。そんな中、俺が選んだ食べ物は…

デン！

きつねのヤツ！

というかけで今回はこちらのカップうどんで優勝していくことにします。

と、おふざけはここまでにして…3分クッキング始めますかね。

用意するものは水、やかん、そしてカツプうどん<sup>本</sup>。作り方は簡単、水をやかんに入れてお湯にして本体にぶち込むだけ。

それでは…

ピンポン

作っていく！

ピンポン

まずはお水をやかんに…

「いる!?!」

「誰だお前は!?!」

「ちよつと!?!」

いきなり押しかけてきた謎のちっちゃな少女。こいつ…どこかで…

「いや忘れないですよ!?!私だよつくつくしじゃねーか!」うるさつ!?!」と、つくし弄りはこの辺りにして真面目にやっついていこう。

「で、なんで来たの?」

「なんでつて…○○くんのお母さんに頼まれて来たんだよ?」

「なんで言つちやつたのかな…」

「とにかく!私が来たからには安心して「あ、看病は間に合ってます」待って!?!」

とりあえずこいつは色々と面倒になりそうだから申し訳ないが早急に退場願おうと思い、大丈夫そうに振舞ってみるが、つくしはそう簡単に引き下がってくれなかった。

「でもつくし、大丈夫だつて。風邪ごときで死ぬわけ無いでしょ?」

「でも○○つて目を離したらまた風邪酷くするでしょ。昔っからそうじゃん。」

「つくし、俺を誰だと思ってるんだ?」

「誰つて?どういうこと?」

「えつと…不死身の男?」

「……やっぱり熱上がってるよね?早く寝た方がいいんじゃない?」

「可哀想なお友達を見るような目をしないで?」

元氣ぶつてふざけるとつくしからはガチめの返しが来て、「本当

に大丈夫か」と言わんがばかりの視線を向けられた。

「とにかく今日は寝てなよ。私が面倒見るからさ。」

「そうします…。」

「それはそうとご飯は食べたの？」

「あ、そう言えば今から食べる予定だったんだ。」

「へえ。何を作ってたの？」

「それ。」

俺は机に置いてあったカップうどんを指さした。

「ちよつと作るから待って」「はい没収。」なんデスと!？」

カップうどんの蓋を開けようとした瞬間、つくしは目にも止まらぬ速さで俺からカップうどんをかつさらって行った。

「いやなんで風邪引いてる時にカップ麺食べようとしてるの!？」

「これしか無かったんだよ!それにカップ麺はいつ食べても上手いんだよー!」

「それでも明らかに風邪引きが食べるものじゃないでしょ!よってこれは没収!」

と言うわけで無慈悲にも俺の昼食はつくしに奪われてしまった。よくも哀れな俺の昼食を奪ったな!

「馬鹿なこと言っていないでさっさと寝る!」

まあこう言われたので素直に言うこと聞いときますか…。

そして布団に入り、数分間時間が経った。流石にあまり眠くないしお腹すいてるしで寝ることは出来なかった。

「あー暇…」

「起きてる?お粥出来たよ。」

「…………え?」

突然部屋の扉が開いたと思ったたらつくしがお粥を持ってきた。あれ?こいつ料理とか出来たっけ?。

「…………何その目」

「いや…つくし、砂糖と塩間違えたりしてないよね…?」

「○○くんは私をなんだと思ってるの!?!流石にそれくらい間違えたりしないよ!?!」



軽く怒りながらもお粥の入っている鍋の蓋を開けてくれた。鍋に入っていたお粥はお米の1粒1粒が白く輝いていてとても美味しそうに見えた。

「ほら、口開けて！」

「……………え？」

「食べさせてあげるから。ほら。」

「いや自分で食べれますけども「いいから！」アツハイ」

とお粥を掬ったレンゲを「早くして」と言わんばかりに俺の方に向けてきた。その圧に耐えきれなくなり俺は言われるがままにそのお粥を口の中に入れてもらい…

「熱っ…」

「あつ…ごめん。冷ますの忘れてた…」

高温のお粥に悶えながらも、すぐさまつくしが渡してくれた水を口に流し込んだ事で一応口内火傷は回避することが出来た。

「大丈夫？まだ食べれそう？」

「うん。熱かっただけで味は普通に美味しかったから。」

「そ…そっか…。じゃあ今度は覚ましてからにするね！」

「いやレンゲくれませんか？」

「駄目。〇〇くんのご事は私がしっかり面倒見るって〇〇くんのお母さんと約束したからね。」

もうほんと勘弁してくれよ…。ただでさえ食べさせて貰うのも恥ずかしい年頃なのに…。

そう考えている俺なんか気にせずにつくしはレンゲに乗ったお粥を覚ましてまた口元に近づけてきた。

「ほら、しっかり食べないと風邪治らないよ？」

「……………はい」

そのまま俺はつくしに言われるがままに1口1口を口に入れてもらい、お粥を完食した。鍋の中のお粥は空になったが、同時に俺の心の中の精神力も空になってしまった。でもお粥は美味かった。

「ほら、お薬だよ。」

「あーうんありがと」

まるで親に看病される小さな子供のような気分だ。でも今だけはその優しさが凄く有難く感じている。

「つくしって親になったら結構いい母親になれるよな…」

「ふえ!？」

そう呟くとつくしは分かりやすく驚きの声をあげた。しかも顔まで紅くしているから一発でどんな心情なのか理解出来てしまう。

「わ、私がお母さんって…いきなり何言ってるの!？」

「いやゝ。思ったことを言っただけだよ?つくしなら立派なお母さんになれそうだなゝって。」

反応が面白くてちよつと追い打ちにからかってみたら更に顔を紅くしてまるでりんごのようになっていた。

「……!!もー!病人は黙って寝る!!それ以上熱酷くなっても知らないからね!？」

お盆を持って早足で部屋から出ていった。やっぱりつくしって反応が面白いからついついからかってしまうんだよな。まあ反省はしていない。

と、まあしばらくの間つくしは何をしているのか知らないけどこの部屋には来ないし、ずっと横になってると気が滅入るし、ゲームは出来ないしで寂しさも相まってだんだんネガティブ思考に突入してしまった。

なので俺はつくしの言う通り黙って寝ることにした。



「あーもう!なんか調子狂っちゃうなあ…。」

一方のつくしはお粥の鍋の片付けを終え、誰もいないリビングのソファーに座りながらそう呟いていた。先程に比べて顔は赤く無くなっていてるものの少しは元に戻っていた。しかし、先程の言葉を思い出す度にどうしても恥ずかしくなっている。

数分間の葛藤の末、このまま考えていても埒が明かないと思い一先ず〇〇のいる部屋に向かうことに。

「○○くん？まだ起きて…」

扉を開けてそう言いかけたが、○○は既に布団の中で眠りについていた。

「……寝ちゃったか。」

そのまま近くにあった椅子をベッドの傍まで持ってきて、そこに座った。

まるで今まで騒いでいたのが嘘かのように静かになり、つくしは少し寂しさすらも感じていた。

「ホント…まだまだ子どもなんだから…。」

微笑みながらも○○の頭を撫でながらつくしはそう一言だけ呟いた。



後日

「で、なんでお前が風邪引いてんの？」

「仕方ないじゃない…！引く時は引いちゃうの…！」

今度はつくしが風邪を引き、○○が看病することになったという。